

青森県下北・上北地方の盆棚

増田公寧¹⁾

Changes in Bondana (Stand for Food and Drinks Offered to Spirits of the Deceased and Ancestors Who Are Believed to Come to Bon Festival Events) in Shimokita and Kamikita District, Aomori Prefecture, Northern Japan

MASUTA Kimiyasu

キーワード：盆棚, 精霊棚, 墓前飲食, 下北半島

はじめに

盆の期間に限って屋内外に設置される臨時の祭祀装置については、盆に去来するとされる死者の霊に対する人びとの心意を表象するものとして、すなわち日本人の霊魂感覚を考える手がかりとして、早くから注目され、分析されてきた。その祭祀装置とは、盆棚、精霊棚、外棚、お客棚などと呼ばれるものである(以下盆棚)。

「盆棚」とは、これまでの研究を踏まえるならば、「盆の精霊祭りのために特別にしつらえられた祭壇」(臨時の魂棚)を一般的な定義としながらも、棚自体の仮設性・臨時性は要件ではなく、仏壇すなわち「常設の魂棚」²⁾で盆の精霊が祭られるならば仏壇もまた「盆棚」であるといえる。また、上記の目的のために設えられるならば、「棚」の形を取らないもの、例えば置き石だけの場合やコモを敷くだけの場合を含め³⁾、形態や場所を問わない。また、本仏・新仏(新精霊)・無縁仏(外精霊、餓鬼)などの対象の別を問わない。すなわち、「盆の精霊祭りの祭壇すべて」⁴⁾が「盆棚」であるといえる。なお、棚にはさまざまな装飾や供物が配置されるが、装飾と供物は棚と不可分の構成要素として、すなわち盆棚と一体のものとして捉えられる。

「盆棚」に関するこれまでの研究については後で確認するが、およそ柳田國男によって示された考え方を出発点として、棚の位置や構造、供物などの表現に三種の霊の位相を見いだすもの、あるいはそのような分析視点について批判的に検討するものであった⁵⁾。同時に、それらの霊に対する表現には地域的な異同が見られることから、地理的分布の偏りを変遷の過程(時間差)として読みとろうとする試みもおこなわれてきた⁶⁾。しかし、いずれも全国を視野にいたした研究は多くはなかったことが指摘されている⁷⁾。理由の一つとして、特定の地域を対象にした個々の調査は、あらかじめ設定された共通の目的や方法のもとにおこなわれるわけではないことから、全体としては豊富な情報の蓄積がありながら、記述に統合性を欠き、広域的な比較研究のデータとして利用しにくいという事情があった。例えば、全国各地の盆棚を分類する場合に、棚の形態についての視点を欠く報告が多いため困難であったという指摘がある⁸⁾。

棚と不可分である供物／飾りなどの要素についても同様であり、視点がなければ記録されない。例えば、本県を含む北海道・東北地方の一部で用いられていながら、ほとんど等閑視されてきた事物のひとつに「トウロウ」(トロ、トロコ)と呼ばれる供物／飾りがある(図3)。「とうろう」(燈籠)といえ、一般的には灯火具が思い起こされるが、本県で「トウロウ」と呼ばれるものは灯火具ではなく、染色したモチ(またはワキシ種コーンスターチ)を焼いた、鮮やかな色どりが特徴の供物／飾りである。この事物は、蛍光色のまぶしい色彩も手伝って、盆の祭祀装置のなかでひととき異彩を放っている。しかし、本県を含む近隣諸道県における従来の調査報告書を見る限り、筆者のこれまでの実地調査から分布域として想定される自治体の調査報告書であっても、必ずしも言及されているとはいえない。とくに北海道については、同地の和人社会が、「移住者によって形成された亜流社会であったために、その生活(民俗)文化の研究は、長い間学会からも等閑視されてきた⁹⁾という事情もあって、道内の各自治体史では殆ど言及されていない¹⁰⁾。

視点の欠如に加え、調査の継続という課題もある。例えば本稿で取り上げた下北地方の東通村については、自治体による総合的な調査から約30～40年を経た現在、その後の変化や現状がわからない(2.地域概況参照)。このような事情から、盆行事のように調査研究の豊富な蓄積が既にある習俗であっても、対象によっては基礎となるデータを既存の資料に求めることは難しく、また現在の状況を把握できない。そこで、あらためて現状を記録することは無駄ではないと考えた。

本稿では、青森県下北半島の東部(およそ下北郡の東北部～上北郡の北部。図4参照)を対象地域として、聞き取りを中心とした実地調査をおこない、屋内外の盆棚(図1,2)の変化と現状について記録し考察する。聞き取りで得られた情報は、主題から外れるものについても併せて記すようにこころがけた。調査はすべて私的におこなったものである。

調査日：20180812横浜町・六ヶ所村、20190805むつ市、20190813東北町・平内町、20200813東通村・六ヶ所村・横浜町、20210221横浜町

1) 青森県立郷土館学芸課 学芸主査 増田公寧 (青森県青森市本町二丁目 8-14)

1. 盆棚をめぐる研究

盆の一連の習俗のなかで、「盆棚」にまつわる事象については、棚の位置や構造や祭式に着目したデータの収集と並行して、それらのデータを霊の処遇という観点で分析する研究が行われてきた。その研究には、二つの立場がある。霊に対する差別の意識が祭祀の空間(場)や祭式・供物などの差として積極的に表現されているとみる立場と、その差は屋外から屋内祭祀へと至る過程で生じた形式的な差異(意識をとまわらない行為の残存)に過ぎないとみる立場である。前者は、最上孝敬、藤井正雄、伊藤唯真らの見解であり、後者は喜多村理子、高谷重夫らの見方である。いずれも、柳田國男によって示された考え方の継承や再検討によるものであることから、まずは柳田の考え方を確認したうえで、その後の研究についても確認していきたい。

(1) 柳田の見解

盆の習俗については『旅と伝説』(盆行事号、1934年)¹¹⁾や『民間伝承』(盆祭特輯、1943年)¹²⁾などに特集が組まれ、とりわけ関心の高いテーマとして、各地の事例報告とそれらにもとづく議論が、戦前戦中を通じておこなわれてきた。そのような議論を経て戦後まもなく刊行された『先祖の話』¹³⁾には、基本となる考え方が示されている[柳田1946]。

柳田の考えによれば「現在の盆の精霊には、やゝ種類の異なる三通りのものが含まれて」¹⁴⁾おり、先祖の霊である「本仏」、亡くなって(一般的には)3年以内の霊である「新仏」、祭る人のいない「無縁仏」の3通りの性格が認められるという。更に、無縁仏には異質な2種類の霊が含まれ、「帰る家のない霊」と、「祀る子孫のない霊」に分けられるとされた¹⁵⁾。これらの霊の区別(差別)は、盆棚や供物によって表現される。

盆棚については、「新たに世を去った人の喪の穢れを、既に清まはつたみたまの祭に近づけまいとした心遣ひは、今でも荒棚の構造の上に現はれて居て、或は此棚を軒の端に設けたり、又はわざと今年竹を柱に用ゐて、それを青葉で包んだり、成るべく常の魂棚とちがへようとす」姿勢がみられるといい¹⁶⁾、三種の霊魂の区別は、盆棚の構造や管理、設置場所に関する差別的な扱いに反映され、それら「盆の魂棚の位置構造又は管理方法」¹⁷⁾には、地域毎の変化があるという考え方が示されている¹⁸⁾。

供物については、柿の葉が無縁仏の供物に用いられる事例に、本仏と無縁仏との差別意識が見出されるとする。すなわち「何か境を設けようといふ趣旨」¹⁹⁾によって、時代とともに日用の食器が変化するにもかかわらず、柿の葉が依然として無縁仏に用いられ、また供え方についても「同じ精霊棚の上で祭るにしても、柿の葉の供物は一段と低く又端の方に置」²⁰⁾かれるのだと説く。あるいは、無縁仏への供物を盛るのは本仏よりも後回しにするが、供えるのは先にする、下ろした供物は食わずに流す、など「明らかに意識した差別待遇をして居る」²¹⁾とみる。このように、霊魂に対する区別(差別)は、供物の種類、供物の供え方・順番にも反映されるという考え方が示されている。

霊魂の区別(差別)意識が生じた要因は、大筋では外来宗教(仏教)による無縁仏の概念の導入であると説かれている。たとえば、「供物」における差別待遇については、「是が初秋の魂祭に伴なうて、最初から有つたものと思はれぬ以上、この点は少なくとも仏教の感化、又はその刺戟に基づくものと言つてよからう」²²⁾と述べる。しかし、「無縁仏」とのちに呼ばれる何らかの存在については²³⁾、「たゞ心ざす一座の神又は霊のみに、供御を進めるだけの式では無く、周囲になほ不定数の参加者、目に見えぬ均霑者といふべきものを、予期して居た」²⁴⁾こと、すなわち、外来宗教の伝来以前に、祭祀の目的から外れた何かしらの存在に対する意識があり、だからこそ「無縁仏」という考えが受け容れられる素地があったこと、すなわちすべてが外来宗教による全く新しい追加ではないことを主張している。具体的には、先祖への「まつり」とは別の、「ほかい」(たむけ)という行為によって示される。その一例として、青森・岩手・秋田の三県の墓前の「ほかい」を挙げ、供物に群がる乞食や乞児、貧民などが象徴的に具現するような、本来の「まつり」の目的や対象から外れるなんらかの存在が意識され、それらに食物を手向ける行為があったであろうことが推測されると述べる²⁵⁾。そして「墓は元来が先祖の祭場だったのだけれども、そこも屋外である故に内外の境が立てにくく、折角それが有るのに又家の奥の間まで、先祖さまを迎へて来るか、さうで無ければこの周囲の群霊の供養に、重きを置かなければならぬこととなつた。それが奥羽や四国の端々に伝はつて居るホカヒであり、又盆といふ名称の由つて来る所でもあつた」²⁶⁾と述べ、屋外の墓地こそ本来の先祖祭の場であったものが、「不定数の目に見えぬ均霑者」と区別するために家の奥の間に「先祖」を迎えるようになった、すなわち、本仏は屋内祭祀へと移行していったという考えが示されている。

以上の主張の要点は、①盆行事の中心は屋外の墓地でおこなわれる先祖祭祀(まつり)であった。②先祖祭祀に際して、もともと何らかの別の存在が意識されていた可能性があるが、それが仏教の感化によって「無縁仏」「外精霊」として強く意識され



図1 屋外(墓地)の盆棚の一例



図2 屋内の盆棚の一例



図3 トウロウ

るようになり、それに対する供養(ほかい)が重視されるとともに、亡くなって間もない不安定な「新仏」の供養が重視されるようになった。③本来は「外郭行事」であった無縁仏の供養や、新仏の供養に意識が向けられ重点が置かれるにともない、区別の必要性から先祖祭祀は屋内へと移動した。④このような変化の過程が、地域的な差異に反映されている、というものである。以後の盆棚や供物に着目した盆行事に関する研究は、上記の観点にもとづき展開された。

(2) 棚の位置が霊の位相を反映すると考える立場

1960年には『西郊民俗』(西郊民俗談話会)で特輯が生まれ、この問題についてあらためて詳細な検討がおこなわれている。そこでは、祭祀の主な対象となるのは「先祖」となる途上にある個々の霊であるが、それらの霊と「差別」されていることが、無縁仏を定義する指標となるという考えが、具体的な事例をもとに更に深められている。桜田勝徳は、「一家一族の管理を越えていながらも、何らかの形で家ごとに祭られてきた霊」のなかには、先祖にも当てはまらず無縁にも入らない第三の霊(嫁ぎ先で子のないまま死んだ女子など)があり、そのような霊の祭られ方(処遇)を確かめることが、先祖や無縁の範囲を定めることにつながると述べた[桜田1960]。この「第三の霊」とは柳田國男がいう無縁仏の異質な2種類の霊のうちのひとつ(「まつる子孫のない霊」)にあたるものであり、柳田國男の説をより具体的な事例によって検討することの必要性を説いている²⁷⁾。

大島建彦は、正月と盆がともに祖霊祭だとすると、その相違は無縁仏の関与の有無にあり、盆の精霊棚の特色を考えるうえで、無縁棚が分析の中心となるという考えを示した[大島1960]²⁸⁾。また、供物のうち、水の子を供える風習については、流れ灌頂や洗いざらしの作法に通じており、もともと、無縁霊を供養する作法の一つだったのではないかと述べている²⁹⁾。現在、通常の盆棚にもこの供物が用いられているが、元来は無縁霊を供養する作法であったものが、家の仏の祭りにも及んだとしている。

最上孝敬は、「無縁仏を迎えるための特別な棚」の祭祀場所や形態の差異が示す意味について検討した[最上1960]。鹿児島から山形までの事例とともに、特別な棚は設けないが「特別な供え物」「特別な供え方」がみられる岡山県から群馬県までの事例を紹介し、これらの事例から、3つの仮説を提示している。すなわち、①古くは家の仏もそれ以外の霊も併せ祭っていたが、仏壇や位牌が作られるようになってから家の仏は屋内に引き込まれる一方、「古い祭の場所は家へ上げられない無縁仏などの祭壇とみなされるようになった」。②元来、家の仏は屋内で祭られていた一方で、仏教により無縁仏の概念が持ち込まれ、別に屋外で祭祀されるようになった。③元来から家の仏は屋内、その他の霊は屋外という考え方があったが、仏教の教えがその進展の過程に影響した、というものである³⁰⁾(最上はのちにあらためて①の立場で論を展開している[最上1975])。①～③のいずれにしても、無縁仏は不安を与えるものであり、そのために祭祀場所が屋外や半屋外であるという類似点が見られるとした。つまり、無縁仏に対する差別感覚が祭祀の位置に反映されたと考えた³¹⁾。

同様の考え方は1970年代以降も継承された。たとえば藤井正雄は、盆行事のなかで、本仏と無縁仏との差別が空間、供物、祭式においてどのように表現されるかを検討している[藤井1971]。本仏は「正常の人間としての生を完うし、祖霊化コースにのって、帰るべき家をもつ霊」であり、いっぽう無縁仏は、「帰るべき家のない遊魂」、「祀る子孫のない霊」という異質な2種類の霊を含むものとし³²⁾、本仏と無縁仏の差別が具体的にあらわれる墓・位牌・盆行事のそれぞれについて観察した。それらのうち盆行事については、無縁仏と本仏の差別の実際を、空間・供物・祭式の3つの側面から検討した。「空間」については無縁仏の棚が屋外(屋外に近い屋内)に位置することや、先祖の盆棚より低い位置に設えられること、「供物」については水の子(水の実)という特殊な供物があることや、供物の容器(供物を載せる葉)が本仏と無縁仏とは区別されていること、「祭式」については、無縁仏に対しては水の子などの供物を投げつけるという行為を伴うこと、これらに差別が表現されていると指摘している。そして、このような考え方の成立には、日本在来の民俗に、仏教が受容されるための共通の要因や共通基盤が存在していたことを考慮に入れなければならないと論じた。「無縁仏」の概念が導入される以前に、それに相当するような存在への意識があったという柳田の主張をあらためて確認するものであるとともに、やはり無縁仏に対する本仏の優位性や差別意識を空間や供物に見いだすという点で従来の考え方を踏襲するものであった³³⁾。

最上孝敬も、あらためて各地の事例から三種の霊の位相と、祭祀の場の関係について検討している[最上1975]³⁴⁾。最上は、盆に祭られる霊には、家の精霊(子孫の幸福を喜び見守ってくれる霊)、新仏(家の仏だが時間が経っていない不安定な霊)、無縁仏(機あらば禍いを起こす懸念のある霊)、の三種類があるという考えに立ったうえで、無縁仏の祭祀について「個別の祭祀」と「共同祭祀」に分けて考察した。無縁仏の棚は、「個別の祭祀」では各戸の縁の外や屋敷内のどこかに設けられ、「共同祭祀」では海辺や川原に設けられるのが一般的であることから、無縁仏の祭祀は、もともと浜辺や川原などでの共同祭祀であったが、仏寺によって檀家の死者供養に力点が置かれたことで盆行事も各家個別の精霊供養が中心となり、それにもなつて無縁仏の祭祀も、個別の祭祀の場(各家)へと引き寄せられたと考えた。そして、排斥する要素が強い行事(ネブタ流し、ネブリ流し、オシヨロイタキなど)と、饗応の要素が強い行事(ボンメシ、カワラメシ、ボンガマ)との二つの習俗には、かつて無縁仏を共同祭祀した頃の名残(屋外における無縁仏への差別的取扱)が見いだせると述べた³⁵⁾。

伊藤唯真も、本仏、新仏、無縁仏の三種の霊の差別がその設置場所に表現されるという従来の見解にのっとり、盆棚の構造と様式について分類を試みている[伊藤1978b]。すなわち、設置場所については、「本仏」の棚は、仏壇前、床の間、座敷など、「新仏」の棚は、先祖の棚とは別に縁側など外に近いところ、「無縁仏」の棚は、縁側の端や前庭、あるいは棚を作らず

に本仏の棚の下に置くだけの場合もあるとした。いっぽう、棚の構造と様式を、「立て置かれるもの」と「吊り下げられるもの」の2種に大別した。前者には、木や竹の四本柱を組み立てたり、竹を三本に組んで横の竹に供物をかけて盆棚と呼ぶところもあるほか、「樽、箱、縁台、机などを利用して棚とし、周辺に竹を立てるといふ簡便なものも少なくない」こと、「最近では仏壇を盆棚とし、前に机を置き、白布やござを敷き、供物を上げるだけの所が多くなっている」「棚を設けず仏壇に飾りをしているところも稀ではない」³⁶⁾ことを指摘し、臨時の棚を念入りに作るものから、簡素化簡便化傾向のみられる棚、更には仏壇を利用するものが近年は多くなっていることを指摘している。これは、棚の時代的な変遷について示唆するものであると言える。盆棚と仏壇との構造上の類似から、盆棚は「仏壇の原初形態」であるとも指摘している³⁷⁾。

そのような簡便化傾向に対して、なお新精霊の棚が、先祖棚よりもとくに念入りに作られる³⁸⁾のは、「不安定で祟りをなす可能性」が高く、「格別の注意」が必要だったから³⁹⁾であるとし、無祀の精霊についても、棚の構造は新仏との共通性がありつつ差異もみられ、そこには家の霊と区別する意識が反映されている⁴⁰⁾とした。

また、柳田國男が『先祖の話』で柿の葉の容器について同様の指摘していることではあるが、供物の供え方(容器)についても、無縁仏への区別が反映されているとした。茶碗を用いず、蓮、桑、里芋、栝(かしわ)、柿などの葉を容器にすることや、たとえ鉢を用いるとしても素焼きにするとといった差別があることを指摘している。

こういった事実をふまえ、三種の霊の位相について、屋内に祭られる「本仏」が、屋外やそれに近い場所に祭られる「新仏」「無縁仏」に対して優位にあり、更に「新仏」は「無縁仏」よりも優位にあるとした。それは、家人の追慕の情や家への帰属性に由来するものであり、三者相互の位相(差別意識)が、祭られる場所に象徴されていると述べた⁴¹⁾。

以上のように、盆に来るとされる霊の祭られ方について、空間、供物、祭式といった側面に、三種の霊の位相が反映されるという見解が、さまざまな研究者によって示された。いっぽう、1970年代半ばには、この見解に再考を促す立場があらわれた。

(3)棚の位置は霊の位相を反映したものでないとする立場

喜多村理子は、盆棚を「生活の場に仏壇が導入される以前の祭壇」と捉え、この棚に着目することが日本人の霊魂感覚を知るうえで有効であると考えて盆棚の考察を進めた。諸事例の分析を通じ、盆における祭祀形態や祭祀場所の違いを、霊に対する差別的待遇と関連づける従来の見方に疑義を呈した[喜多村1976,1977ab,1985]。まず、1976年の論考では、静岡、徳島、愛媛の事例として、先祖を軒下や庭で祭る場合や、新仏を床の間や縁側、軒下、川原に祭る場合があることなどから、祭祀場所について「全国的に共通する特異性はなく、先祖や無縁・餓鬼なども同じ様な場所で祀られる」のであり、屋外での祭祀が新仏や無縁仏に限定される特徴ことではないこと、すなわち本仏も屋外で祭られる場合があることを指摘した⁴²⁾。さらに、翌年の論考では全国的視野で祭祀の「対象」「形態」「場所」についての分類をおこなった。「対象」については、「先祖」「新仏」「得体の知れない仏たち」の3種に分類し、「形態」については、a.棚の四隅に(葉付きの)竹を立てる形 b.四隅に竹を立てて何らかの葉で囲う形態 c.壇または台を設ける形態 d.天井から吊す形態 e.杭や柱に板や箱を取り付ける形態 f.箕 g.その他 の7つに分けた。「場所」については、「仏壇の前」「床の間」「座敷」「縁側」「軒下」「庭」「川原・海辺」の7ヶ所に分けた⁴³⁾。この分類に基づいて青森から鹿児島に至る45都道府県の事例を考察したところ、本仏は屋内、新仏や無縁仏は屋外で祭祀するという一般的傾向がみられるものの、本仏を屋外で祭る事例も確認された。また、屋内における位置という観点でも、本仏が屋外寄りの場所(縁側寄り)に祭られる例がかなり多いことが指摘された。更に、正月棚との比較では、正月棚の多くは屋内である一方、盆棚は戸外または戸外に近い場所に設置され、室内の奥に祭られる場合であっても、屋外が意識されている事実を指摘した。つまり、本仏を含め、霊の迎えられる場はもともと屋外であった可能性を示唆するものであった⁴⁴⁾。

その後も喜多村は各地の事例をもとに考察を進め、1985年の論考では屋外あるいは屋外寄りという棚の位置が、本仏以外の霊に対する差別的な扱いを表現しているとは言えないとする結論に至った⁴⁵⁾。三重県、兵庫県、徳島県では、無縁仏が室内に祭られる場合には、仏壇の隅や座敷の棚の下といった「明らかに差別的な扱い」がみられるものの、本仏については縁側や軒下、庭先などの「差別的」であるとされる場所に祭られる事例が多いことから、屋外や屋外に近い場所で祭ることを空間的差別とすることに疑問を呈した。具体的には、たとえば兵庫県但馬地方の沿岸部(余部)の事例では、仏壇は先祖で屋外の棚は無縁という解釈は、寺院による無縁の概念の導入によるものであり、元来は屋内の棚(仏壇)と屋外の棚の両方で先祖を二重に祭っていたという⁴⁶⁾。徳島県那賀郡(相生町)では、盆の祭壇は屋外の棚であるという観念が、仏壇導入後も強く残り、わざわざ位牌を屋外の棚に移して祭る事例があり、徳島県那賀郡(木頭村)では、先祖を祭る棚を、縁側あるいは縁側よりに設ける事例がみられるという。これらは、先祖祭りはすべて仏壇というパターン化への「過渡的な諸形態」であるとみる。餓鬼棚についても、鳥羽・志摩地方では、餓鬼棚に先祖の杖を取り付けたり、餓鬼棚の下で先祖に対する迎え火や送り火を焚くという事例がみられるという。これらの事例から、「餓鬼棚は果して屋内での先祖供養を邪魔するおそれのある無祀の霊を屋外で慰め祭るためのものなのだろうか」「むしろこれらの民俗は、屋外の棚が盆に迎えられるべき霊の仏壇以前の祭壇であった、その名残りを行為の中にとどめているものではないだろうか」と述べ⁴⁷⁾、「このような三者の場所の相違はその土地土地での区別にすぎず、全国的に普遍的な相違となっていない」⁴⁸⁾と指摘した。すなわち、「どこでどう祭るか」=「行為としての民俗」と、「何を祭るか」=「意識としての民俗」の両者は同時に定着したものでない主張した。屋外の棚でおこなわれていた行為のかたちが、意

識や内容を伴わずに伝承される場合もある、という主張である⁴⁹)。また喜多村は、盆棚の形態と祭られる霊の種類との間にも相関がみられないことを明らかにした。

同年、高谷重夫も喜多村とほぼ同じ説を発表した。祭壇の「構造」、「位置」、「供物」の3点から、本仏と無縁仏の区別について分析し、いずれについても両者を区別(差別)する表現として解釈することはできないとした[高谷1985]。祭壇の「構造」については、柳田國男によってアラ棚の特色とされたものが本仏の棚にもみられることや、高燈籠や軒端・霊前の燈籠の掲示が、現在ではあたかも新盆の景物となっているが、かつては新盆に限ったものではなかったことなどから、いずれも「本仏と新仏との性格の相違の証とはならない」とした⁵⁰)。「位置」についても、本仏と、新仏・無縁仏の棚の設置場所の相違は本来の姿ではなく⁵¹)、本来は屋外の棚が本仏の祭壇であり⁵²)、本仏の祭場が屋内に移ってきたのちも、「もとの慣行は廃せられず、屋上に屋を架して行った結果がこのような習俗を生んだかと考えられる」⁵³)とし、本仏も元来は屋外で祭られていたのだから、祭壇の位置の違いから本仏と無縁仏の性格の相違を説くことはできない、場所の差異が性格の差異をあらわすものではないとした。すなわち、もともと本仏を屋外で祭っていたのであれば、屋外で祭ることが、必ずしも「遠ざけたい」という感覚にもとづくものではないという主張である。屋外が本来の祭祀場所である点と考えるのは最上孝敬の説⁵⁴)に通じる。(最上が戸外の棚には当初から無縁仏も本仏の脇や下に併せ祭られていたと考えたのに対し、高谷は、戸外の本仏の棚の下に無縁を祭る例がないことから、屋内の本仏の棚の下や脇に無縁を祭るのは、本仏の棚が室内に移ったのちに、戸外に残った無縁仏の棚も引き寄せられた現象ではないか⁵⁵)と主張している点は異なる。)また、「供物」についても、柿の葉や里芋の葉を容器とする例を柳田國男は無縁仏に対する差別的扱いとして例示しているが⁵⁶)、実際は草木の葉に供物を盛ることはきわめて普通のことであり、柿の葉が無縁仏専用ではないこと⁵⁷)、箕の使用も無縁仏特有ではないし、水の子も地方によっては墓参の供物であるなど、無縁仏だけに用いられるものではないことを挙げ、無縁仏に先に献供すべしというマナーは、餓鬼が食欲だからではなく、無縁棚が本来の魂棚であるという感覚が残っていたことに由来すると考えた⁵⁸)。

高谷はまた、近畿地方3県(和歌山、奈良、大阪)の32事例から「もらいまつり」における客棚(客仏、もらい仏を祭る盆棚)についても、祭祀場所の相違は差別意識に基づくものでないことを示した[高谷1988b]⁵⁹)。客仏については従来、「祀り手のない不安定な霊」であり、「他家に嫁いだ婦人が実家の霊を供養する」ものとする主張⁶⁰)があったが、これに対し高谷は、客仏は「祀り手のない不安定な霊」ではないし、「実家の者が他家に嫁いだ者の霊をまつる」側面が強いことを指摘した。そして、客棚に祭られる親族の範囲には共通の決まりはなく、盆棚の祭祀を通じてみる限り、客仏と家の新仏との間に差別が見られないことを指摘した。客仏が屋外の棚に祭られる事例があることについては、仏壇の普及につれて先祖の棚が内へ入り、残された屋外の棚に、先祖以外の霊すなわち無縁仏や新仏・客仏が祭られるようになったことを示唆するものであるとした⁶¹)。

(4) 盆に迎える霊とは何か

喜多村理子は先述の論考で、祭られる対象を「得体の知れない仏」「何らかの霊」と表現している。それは、元来盆に迎えられた存在とは何かという本質的な問題があるからである。柳田國男も祭祀の中心となる「先祖」以外に「不定数の参加者、目に見えぬ均霑者といふべきもの」⁶²)という表現で、「無縁仏」として概念化されていない「何らかの存在」が意識されていたであろうことを述べている。これに対し喜多村は、「先祖」という概念も後付けのものであり、迎えられるものは、柳田が説く「先祖」とは異なる、よりプリミティブな存在だったのではないかと考えた。夏に屋外で「何らかの霊」を祭っていた民間習俗に、仏教的な「先祖」や「無縁」の概念が導入されたことにより、空間的な区別がなされ、それを更に促したのは仏壇と位牌であったのではないか、その浸透具合によって祭祀の場が多様化したのではないかと主張した⁶³)。

遡って折口信夫によれば、盆に迎えられる存在は、二種類の「魂」であるという[折口1930-1932]。古代の人々は「身体に著くと其人の威力となる魂」と、「病的な禍の源となる魂」があると考え、年末や、中元から盆の時節になると遊離して人の身を求めてさまようので、年に二回の祭りをしたという。そして、「威力の根源たる魂は、完全に生きた人に著け、病的な魂は、身体に著く事なしに、帰らせるやうにする。其が盆の行事である」と説いている。折口は、「先祖」という概念よりも原始的な、人の力のみなものになったり、力を失わせたりする「何らかの存在」を示唆している。そして、盆には後者(「病的な魂」)も丁重にしなれば崇ると考えられたことから、両者をともに迎え祭るのであり、その装置(神を迎える方式)としての盆棚は、もともと屋外や屋外よりに作られていたが、のちに家の中に仏壇とは別の棚で祭るようになった、と述べている⁶⁴)。

田中久夫は、7世紀初頭以降に文献に現れる盂蘭盆行事の展開をたどり、『往生要集』の記述を根拠として、先祖に対する餓鬼や無縁仏の正体が、実は「田の神」であったという大胆な仮説を提示した[田中1979]。その根拠とされたのは盆棚の供物である。供物の中心を担うのは、花の咲く前の稲であり、未熟な柿の実、サツマイモの蔓などとともに盆棚に掛けられる。盆にこれらの供物を捧げ祭る対象はもともと「先祖」と「田の神」であったが、『仏説盂蘭盆経』の影響により、「先祖」(父母)に対して後者が「餓鬼」とであると理解されるようになった⁶⁵)というのである。外来宗教の導入より以前から「先祖」以外にも「もとまつられるべきもの」⁶⁶)が想定され、先祖以外の霊のすべてが外来宗教による新しい概念であると断じることはできないと考える点では柳田國男の主張に通じている。

盆に迎える霊の問題については、アジア地域にひろく展開する類似の習俗に目を向ける必要がある。鈴木満男は比較民俗

学的な視点で台湾の中元節について検討し、我が国の盆行事の主役となるものも、元来は「先祖」ではなかったことを示唆している[鈴木1972]。鈴木によれば、台湾の中元節には4つの特徴がみられるという。①主役は無祀のため空腹である孤鬼である。②孤鬼の空腹を満たすための行事である。③孤鬼は頭目により統率される。④他の邪悪な霊とは区別され、邪悪な霊は爆竹により除外される。以上の4点である。すなわち、台湾の中元節では、先祖祭祀の要素は薄く、主体となるのは無数のさまよえる餓鬼であるという。鈴木は、韓国の中元における「亡魂日」行事もあわせて考えると、我が国の盆行事の本質も、先祖祭祀ではなく、むしろ無縁の霊にあるのではないかと述べる。例えば我が国にもみられる高燈籠や燈籠流しに対比される行事は、中元節ではいずれも孤魂を招く装置である。中元節における、カンテラを吊した竹や木「燈篙」(とうこう)は、先祖霊ではなく、陸上にある孤魂を招くものであり、竹筏に紙の家をのせ、蠟燭と線香をともし「放水燈」は、水中にある孤魂を招くものであるという67)。

中国東南地域の死者祭祀について研究する何彬(He Bin)は、鈴木 of 指摘を示唆に富んでいると評価する[何2012,2013]。何によれば、中国東南地域の中元節は「祭祀対象が異なる複数の儀式・儀礼の重合したものであり、「主役は単一ではなく、複数の『身内の霊』と他者の霊の『鬼』である」という68)。福建省東部の福州では、中元に先祖の祭り(祭祖公)が行われたあとで、人々が非常に恐れている下界爺(無縁仏に相当)に対する祭り(半段)が特に念入りにおこなわれるという。また福建省南部の泉州では、中元に先祖の祭りをおこなったあとで、普渡公(無縁仏に相当)に対する祭り(普渡)がおこなわれるが、一日一度の儀式では終わらず、5回にわけて儀式がおこなわれるのだという69)。いずれも、無縁仏の脅威を意識し、恐怖心を抱きながら、先祖祭祀よりも強い緊張感をもって望むのであり、「祀られる対象は(略)祖先が永遠の主役ではないという特徴」があるという70)。このことから、民間でいう「中元祭祖」という言葉は不正確であり「中元祭霊」とされるべきであると指摘している71)。こういった指摘は、無縁仏・無縁棚に注目することの重要性をあらためて示唆するとともに、我が国の盆行事の本質について再考を促すものである。

(5)盆棚の形態的分類

これまでみたとおり三種の霊、とくに無縁仏の取り扱い方と性格については、主に祭祀空間(棚の「位置」)を視点に議論がおこなわれた。一方で、棚の「形態」についての検討もおこなわれてきた。そこで話題にされたのは、盆棚と正月棚の共通性と、盆棚の多様性であったが、いずれも漠然としたものであった。

喜多村理子はこのことを指摘したうえで、具体的な分類を試みている[喜多村1977a,1977b]。喜多村は、盆棚を以下a.~g.の7種に分類した。a.「棚の四隅に(葉付きの)竹を立てる」 b.「棚を葉やこもで囲む」 c.「壇または台を設ける」 d.「天井から吊す」 e.「杭や柱に板や箱を取り付ける」 f.「箕」 g.「その他」の7類型である。これらに設置場所等の分析指標を組み合わせ、三種の霊の取り扱いについて検討した72)。喜多村によれば、a.は盆棚として最も一般的な型であり、木を組んで作るほか、四斗樽を並べて戸板を載せるものもこの型に含めている。そして、竹四本を四隅に立てることを重要視する。b.は四隅に竹を立てた棚を何かで囲うもので、葉に限らずムシロ、ゴザ、障子、ふすまで囲うものも含まれる。囲うという行為が重視される。c.は2~3段のひな壇、または机や箱などを祭壇とする形式である。d.は天井から吊すもので、縄や針金で吊す不安定なものと、木で吊す安定したものの2種がある。e.は杭や縁側の柱などに板や箱を取り付けた型で、b.の棚が簡略化されたものである(無縁棚に多い)。以上の形式的分類と同時に、a,b.型にみられる四隅の竹、b.型にみられる囲う行為、d.にみられる吊る行為、f.にみられる箕の使用について、それぞれ問題を提起している73)。

伊藤唯真も、盆棚の構造と様式について分類し、棚の時代的な変化について指摘した[伊藤1978b]。伊藤によれば盆棚には、「立て置かれるもの」と、「吊り下げられるもの」、の2種類がある。前者には、木や竹の四本柱を組むものや、竹を三本に組み、横竹に供物を掛けるもののほか、「樽、箱、縁台、机などを利用して棚とし、周辺に竹を立てるという簡便なものも少なくない」こと、「最近では仏壇を盆棚とし、前に机を置き、白布やござを敷き、供物を上げるだけの所が多いこと、「棚を設けず仏壇に飾りをしているところも稀ではない」74)ことを指摘し、盆棚の簡素化・簡便化傾向と同時に、仏壇を利用するものが当時すでに増えつつあったことを指摘している。これは、棚の時代的な変遷について示唆するものであると言える。盆棚と仏壇との構造上の類似から、盆棚は「仏壇の原初形態」であるとも指摘している75)。

更に詳細で具体的な形態的分類を試みたのが、高谷重夫である[高谷1988]76)。常設の棚である仏壇を除き、各地にみられる盆棚の形態を図によって示し、A~L(型)までの12種類に分類した。A型は「石を置く簡素な形」、B型は「砂を盛り固めた祭壇」(関東の一部に集中)、C型は「一本の柱の上に板や箱を据えたもの」(中国地方の一部に集中)、D型は「吊り棚」、E型は「桶を伏せて祭壇とするもの」、F型は「四隅に竹を立てるもの」(全国に分布)である。続くG型からJ型はF型のバリエーションで、G型は「棚の周囲を覆うもの」、H型は「G型に屋根のついたもの」、I型は「G型の上部に縄を張り供物を吊るし、別の台に菰を敷いて供物を供えるもの」、J型は「柱が2本に省略され横木や縄に供物を吊すもの」(東日本に多くみられる)である。K型は「箱や箕などを台にするもの」、L型は「三方を柵で囲んだ涼み台のような形式」である77)。

四本の竹を立てる形式について、喜多村理子は、聖域を標示する形式であると主張したのに対し、高谷重夫はC型やD型の事例や、棚に梯子が掛けられる事例から類推して、棚を高く掲げるたの構築材としての意味合いが強いと主張した。そしてこの

形式は古い時代から伝承された祭壇一般の形式に則ったものであると考えた78)。

(6)地域差の持つ意味

祭祀場所と霊の位相との関係は(1)～(3)で見たように主要なテーマであったが、それを地域差として全国的な視野ではじめて具体的に示したのは喜多村理子である[喜多村1977]。喜多村は北海道と沖縄を除く全国45都府県の事例を分析し、①新仏については、東の地域では初盆に特別な棚を作ることは少なく、毎年同じような棚を室内に作るが、西に向かうに従い、屋外・半屋外に特別な新仏の棚を作ることが多くなる傾向のあること、②餓鬼や無縁も同様の傾向があり、東の地域では、棚の下や隅に祭ることが多いが、西のほうでは、縁側、軒下、庭などに独自の棚を設ける

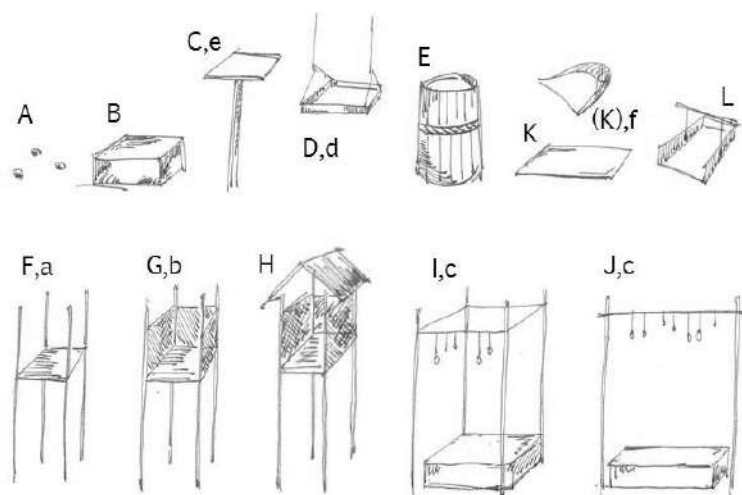


図4 盆棚の型式分類(高谷1988,喜多村1977を参考に作図)

A~L:高谷 a~e:喜多村

ことが多いことを指摘した。つまり、習俗の分布に地理的な偏りのあることが示された。ただしこの地域差が持つ意味については言及されなかった79)。その後喜多村は、東京都、埼玉県、愛知県、兵庫県、徳島県、愛媛県、山口県などの事例を挙げて、先祖を祭る場所が、屋外から屋外に至る線上の多様な位置にあることから、それらの事例は「先祖祭はすべて仏壇で行うというパターン化されてしまうまでの過渡的な諸形態」であると考え、祭祀場所の多様さを変遷の過程(時間差)として解釈した[喜多村1985]80)。

喜多村のように、地域差が示す意味を変遷論的に解釈することについて、関沢まゆみは(地域差は)「その地域における盆行事の特徴であって、盆棚の設置場所と形状との差から時代差という変遷の過程を想定することには論理的な飛躍がみられる」として当初は慎重な立場をとった[関沢1999]81)。関沢は、奈良県大和高原地域を例に、宮座祭祀における長老衆の死穢忌避観念の強さや、地域の人々の墓地や遺骸に対する執着のなさが際立つ一方で、盆行事においては本仏・新仏・無縁仏を「それぞれの分に応じて」明確に区別し、「霊魂は仏壇で子孫によって丁寧に供養」されていることを述べ、これを柳田國男が指摘した「三種の霊」を明確に区別する具体的な事例として示した。しかし、そのような「三種の霊」の位相の明確な区別が、曖昧化・多様化していく過程として諸事例を解釈する喜多村の仮説については、更なる論証の必要があると考えていた82)。

また新谷尚紀も、日本各地の盆における霊の迎え方の多様性を4つのタイプ83)に分けたうえで、「これらは一方のタイプからもう一方のタイプへと変遷してきたという時間差を示しているのではなく、それぞれの地域における盆棚と霊魂感覚の特徴を示しているものと考えたほうがよいであろう」と述べ、地域差は、それぞれの地域社会が歴史的に培ってきたものの違いが反映されているのであり、変遷の過程を示すものではないと考えた[新谷2003]84)。

しかし、関沢まゆみは後に、近畿地方(滋賀県1例・奈良県1例)と、東北地方(秋田県1例)、九州地方(熊本県2例・鹿児島県1例)における自身の調査事例と、各地の報告書の事例をもとにした論証を通じて、変遷論的な解釈の可能性を示した[関沢2013]。関沢は、三種の霊の区別の有無と、墓前飲食の有無を分析指標として組み合わせることにより、日本列島のうち東北から九州までの地域を三つの類型に分けた85)。すなわち、①三種の霊の区別をせず、墓地に棚を設けて飲食するタイプ:東北・九州地方(第1類型)、②三種の霊の区別が厳格でなく、屋外の棚で祭るタイプ:中国・四国・東海・関東地方(第2類型)、③三種の霊を区別して祭るタイプ:近畿地方(第3類型)の3タイプである86)。そして、①が最も古く、8～9世紀の近畿地方で行われていたが、10～11世紀以降は貴族の触穢思想の影響などから③の習俗へ展開していったこと、②は①から③への過渡期の状況を示すものであると考えた。この解釈は、民俗情報(地域差)を歴史情報(時間差)として読み解く方法として柳田が提唱した比較研究法の有効性と可能性を提示するものであった。課題として、更に各地の事例を詳細にあつめ、地理的なメッシュを細かくした精緻な分析の必要性が指摘されている87)。この課題に応える研究としては、近年では藤井弘章が、和歌山県高野町や橋本市をフィールドとしておこなっている綿密な調査と記録が挙げられる[藤井2019, 2020]。藤井は、特定の地域内の情報にも、地域差や変遷を考える要素が多く含まれていると述べ、地域での重点調査の必要性を訴えるとともに、盆棚の実態が体系的に把握されていない和歌山県内の事例を丹念に記録している88)。

以上のように、盆棚の位置・構造・供物に三種の霊の性格や位相が表現されると考える立場と、それを批判的に再検討する立場から議論がおこなわれると同時に、盆棚そのものの形態的な分類や、迎えられる霊の性格やルーツについての研究が、積み重ねられてきた。近年では、盆に迎えられる霊の処遇や認識の地域的な異同に着目し、全国的な視野でその民俗情報を歴史情報として解釈する試みが、研究の新たな方向性を示している。同時に各地域を対象とした調査が進められ、データが蓄積されている。

2. 地域概況

本稿で対象とした地域は図5の通り。むつ市大曲(a)は明治30年代に開拓された近代の集落である。下北郡東通村砂子又(b)は田名部川の最上流域にある山間地の集落、東通村老部(c)、白糠(d)、六ヶ所村泊(e)、上北郡横浜町有畑・鶏沢(f)、百目木(g)、東津軽郡平内町狩場沢(k)は、いずれも漁港のある海沿いの集落である。上北郡東北町山添(h)、添ノ沢(i)、宇道坂(j)は陸奥湾の支湾である野辺地湾の南方にあり、清水目川(野辺地川)沿いに点在する沢沿いの集落である。

それぞれの地域については各項目で簡単に触れるが、本稿が対象とする地域における盆行事の概要をあらかじめ把握するために、ここではその代表例として下北郡東通村域における民俗調査の経緯と主な事例、調査に関する地域的な課題について記す。

下北郡東通村を対象とした調査は、1971年の青森県教育委員会による『下北半島山村振興町村民俗資料緊急調査報告書(第一次)』⁸⁹⁾をはじめとして、1980年から1987年までの7年間計6回にわたり発行された『青森県下北郡東通村民俗調査報告書』(東通村教育委員会)に、その成果がまとめられている⁹⁰⁾。この間、青森県立郷土館による調査が小田野沢地区を対象におこなわれ、1983年に『青森県立郷土館調査報告第14集 民俗7 小田野沢の民俗』として刊行された⁹¹⁾。更に、以上の調査をもとにして、1997年に東通村から『東通村史 民俗・芸能編』が刊行された⁹²⁾。

青森県史編さん事業の発足にともない、下北地方についてあらためて調査がおこなわれ、「下北半島北通り」(大間町・風間浦村・佐井村・大畑町)および「下北半島西通り」(脇野沢村・川内町・むつ市)を対象とした報告書が『青森県史叢書』として刊行された(2002-03年)。しかし、「東通り」すなわち東通村域のみは、上述のように『東通村史』の充実した成果があることから、叢書の刊行を目的とした総合的な調査はおこなわれず、対象を大幅に限定・選択した調査がおこなわれた。そのため、2007年に刊行された『青森県史 民俗編 資料 下北』では、たとえば東通村の民俗芸能に関しては詳述される一方、盆行事については、盆棚の写真1点が掲載されているほかに、東通村域に関する記述や写真は全くみられない⁹³⁾。

このような事情から、現在われわれが報告書によって知ることができる東通村域の盆行事の習俗は、おおむね30～40年前の状況、すなわち1970年代～80年代の事例である。その後の変化や現況についてはあきらかでない。以下は、上記報告書にもとづく、約30～40年ほど前の東通村域20集落の盆行事の概要である。

- ・ナノカ盆は、新暦8月7日におこなわれる。その準備のために墓の掃除と墓の盆棚づくりをおこなう。盆棚の供物は主にブドケバ(ぶどうの葉)に盛った赤飯(またはアズキママ)で、子どもは7回水浴をして7回飯(持参した赤飯)を食べるという伝承が村全域にみられる。同日は水神様の祭日であるとする集落がある(上田屋)。また、新仏のある家のみ7日の墓参を3年間おこなう(新仏のない場合はナノカ盆をおこなわない)という区別が、20集落中6集落でみられる。
- ・13日盆は、新暦8月13日午後～夕方に行うところが多い。迎え火についてはほとんど記述がなく、行わないと記される地域は1ヶ所だけ(目名)である。ホゲ(墓参)の順序は、巡拝対象の多いケースでは①屋内の盆棚②先祖の墓③親戚の墓④地藏や無縁仏⑤テラ(位牌)である。墓のホゲ棚(盆棚)は、木の枝や木材で四つ脚を組み、両側に盆花を供え、横木を渡した上にコモを敷く形態が多い。この調査の時点(1970-80年代)で「棚を作っていない」⁹⁴⁾とされる集落が、20集落中5集落みられる。
- ・供物の容器がブドケバ(ぶどうの葉)である点は共通している。供物のうち、料理は赤飯(またはアズキママ)、煮しめ、豆もやし、キュウリなます、テンが共通している。野菜や果物は、スイカ、トマト、キミ(とうもろこし)が供物として捧げられる。野菜の牛馬についての記述は殆どなく不明だが、「作らない」と明記される集落が1ヶ所(目名)ある。また、ハマナスの実を連ねて作った数珠を墓石に掛けるという集落が散見される。「アラレコ」といって、米と茶葉を和えたもの(水の子)を用いると記される集落が2ヶ所ある。
- ・墓前飲食についての記述はない。ただし「ホゲサライ」(墓参の供物奪い)と称して、供物を子どもたちが競って食べる(持ち帰る)習俗があったという集落が、7か所ある。ただし、現在はおこなわないとするものが多い。
- ・屋内の盆棚として、主に仏壇とその周辺が利用される。仏壇の前に、「盆飾り」「ハタ」「ボンリン」と称して、色とりどりの盆菓子のほか、スーパーで売られている既成の袋菓子や、野菜や小さな果物を糸で繋いだものを複数下げる。両脇に昆布を下げる地域もある。これらの菓子や供物を下げるために、横棒や縄が用いられる。多くの報告書ではこれらを「盆飾り」として捉えている⁹⁵⁾。また、写真から判断して正月と同様のメ縄を用いているとみられる集落が1ヶ所(岩屋)ある。盆花にはキキョウ、アワバナ、ミソハギなどが用いられている。盆の間、仏壇から位牌を取り出し、仏壇のそばに別の祭壇を設えるという事例が2ヶ所報告されている。屋内の盆棚の供物は、基本的に墓前の供物と同じである。
- ・新仏がある場合には、20日まで高燈籠を立てる、朝晩ホゲをするという事例のほか、無縁仏への供物を「ガキノママ」と称した

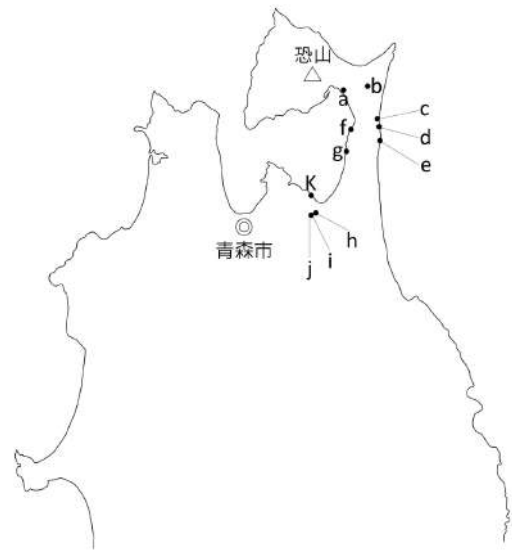


図5
a.大曲 b.砂子又 c.老部 d.白糠 e.泊 f.有畑・鶏沢
g.百目木 h.山添 i.添ノ沢 j.宇道坂 k.狩場沢

り、墓掃除の日に無縁仏を意識して刈り払いをししたりする事例がみられるが、霊魂についての区別や差別の意識は希薄で、供物の種類や盆棚の構造、位置、墓参の行為等を見る限り、明らかな差別的表現はみられない。

・仏送りは、「ホトケナガシ」(仏流し)と称し、多くは16日または20日におこなわれる。1980年代の調査時では、供物をコモに包んで、実際に海や川に流していたようである。コモではなくコンブに包むという集落が1ヶ所(白糠)ある。この日、送り出す仏への土産として餅やだんご、そうめんを供えるという集落が散見される。送り火を焚くという記述は殆どなく、1ヶ所のみである(下田屋)。

・20日盆は、地域によっておこなわれており、この日に供物を流すところもある。仏壇には赤飯(またはアズキメシ)を供え、パパ連中(年配女性の講)がテラ(無住の庵、集会施設)で念仏を唱える。

以上が、従来の調査報告からみた東通村における盆習俗の概要である。先にも述べたとおり、これらの報告がかつての盆行事の全体像を知るうえで貴重な記録であることは言うまでもないが、たとえば本稿のように盆棚や供物といった個々の事象について把握するためのデータとしたい場合に、記述内容に統一性がないことや、調査後約30~40年を経た現在に至る変化や現状がわからないことなどの課題がある。

3 調査結果(事例)

a.大曲(むつ市)

大曲はむつ市南部に位置し、津軽地方から移住した藤田千吾らが中心となって明治30年代に開拓した地域である⁹⁶⁾。

A氏 1943(昭和18)年 東通村蒲野沢生まれ 女性

昭和39年に21歳でむつ市大曲に嫁いだ。A氏は8月5日に墓掃除のため、大曲の共同墓地を訪れた。

【屋内の棚】

- ・盆棚 以前は、トウロウや盆センバイを何枚かずつ糸でつないだものを、仏壇の前に吊していた。現在は2個1組のトウロウを掛けている。
- ・供物 法界弁当を家に1つ、墓に1つそれぞれ供える。

【屋外の棚】

・墓参 墓参のことを、「ホカイする」といった。7日も13日も「ホガイする」という。7日がお盆の始まりだと認識している。7日盆には墓掃除をするので、あげものも持って来る。ジュースやお菓子、花などをあげる。7日には、法界弁当は供えない。今年は7日に来られないので、今日は8月5日だが早めに来た。出身地の東通村蒲野沢では、7日盆といえば、ムヨガ(6日)の晩に、死んで3年くらいまでは墓参りしていた。東通ではタナを作っていたが、大曲ではタナは作らない。大曲では墓参りは13日に来て、トウロウやハマナスの数珠、料理はテンやキュウリの酢の物、煮しめなどを持って来てあげる。現在は迎え火を焚かないが、当地に嫁いだころは墓前で木を燃やして帰った。——「(今は)やらない。わいど来た当時はあった。火こ焚いて。木燃やして火こたいて、ちょこっといでそして帰った」。15日はホガイするとはいわず、墓掃除に行くと言って、今まであげた供物をおろして片付ける。昔は実家のほうであれば、棒で4つ立てて花を立てて、棚を作って、コモを敷き、ブドウのキャンバに赤飯をのせて供えていたが、今の若い世代ではセットになったもの(法界弁当)を利用している。東通村の実家で棚をつくって供えていた当時は、トウロウを使っていなかった。——「ぶどうのキャンバさセギハンやって、そうやってやったて、今みんな若い人だちそういうのやってれねして、なんがセットになったのみたい。その頃だばトウロウはやっていなかった。ヒガシ(東通村)のほうだばな」。20日(二十日盆)には墓掃除をする。

・供物、墓前飲食 昭和20年代当時は食べる物に乏しく、子どもたちはみな、墓参に来る人をみれば競って駆け寄り、供物をもって食べたものだという。「今日は13日のホガイだから、みんなで行って待ってよう！」と言って墓地へ向かった。墓地には子どもたちが大勢いて、参詣者を待っていた。墓に供えたものを食べると、「ためになる」とも言われた。それは昔の話であり、今では供物を食べる子どもはいない。飾りのトウロウも食べたことがある。味はしなかった。家族や親族が墓前に集まっての飲食まではなかったが、墓参のあとに多少のものを口にした。残りは墓前に置いていき、カラスが来て食べた。今では放置しない。——「今日13日だから、ホガイ(「ガ」にアクセント)に行くが、わいども行って待てるべって。子どもだづぎ(笑)。「わいどは(小学校)うーん、4年が5年だなあ。へて、食うものねどごでハガさ来て、そのご飯もらって、あれこやして見て今この人来た来たって言ってほながさ行って、へてそのあげだのを貰って食べだった。そういう記憶はあったけど今は誰もそういうの食べねっきゃムガシはそれしか食べるのねんだもの。(こどもだちが墓で)いっぱい待ってだ。はは(笑)。そして走ってそごのハガの前さ行ってあげるの待って、こやして食べだった。けど今はだいま、そういうの子どもどもねべし、そういうのがねっきゃムガシみたいにな。」「昔だばそれしか食べるものあねして取り合いつこして食べだもんだけどな。」「うん(トウロウも食べたことがある)。



図6 大曲共同墓地

なも味もね、カサカサって。」「ちよどわいどのづぎ食べるのねえじゃ。戦争当時の終わったアレでだから。」「(供物を)あげるとぎだげ(子どもたちが)来てほら。なんてる上げだのを食べれば、ムガシの人はためになるよって。食べだ。」「みな親子ど(たち)きてあげで、拜んだら、それ食べて、へてあどは置いてげばカラス来てな。散らかすがらって。今の人は置いてがねけどムガシだば置いてった。」

・その他 (大曲を開拓した藤田千吾の墓については)知らない。東通りから嫁いで大曲に住んでいる。1964(昭和39)年に嫁いだ時は、サルケ(泥炭)は焚いていなかった。現在田になっているところから泥炭を採ったと聞いている。恐山に行く途中の消防署がある場所にあった製材所から購入した端材を焚いた。——「サルケ焚いだってはゆってたけど、わいどづぎああの、製材したジャッパ。マジたいであったな。製材がら買って来てあら。半端だの買ってきて。焚いでた。」「わいど来たときは焚いでねがったなあ。うん。サルケ採るに大変だったって。田圃のほうがら採るどごで。(今牧草地になっているところはみな)田んぼ田んぼ。これがらサルケ採ったみたい。ぜーんぶこれ田んぼだったけど、今こんだはあ、田んぼそらして滅反して誰もやってねっきや。うん。」

b.砂子又(東通村)

下北半島東部に位置する東通村の中央部に位置し、田名部川上流の大川の西側の低地と東側の大地に、川を挟むように集落が広がる(97)。

B氏 1925(大正14)年 砂子又生まれ 男性 および息子のC氏

曾祖母と長男の嫁(C氏)はともに東通村老部(おいっぺ)出身。

【屋内の棚】

・盆棚 棚に(上から順に)トウロウ、盆センベイ、トウロウ、盆センベイ、トウロウ、盆センベイ、小さな青リンゴの順に糸に結びつけたものを5本吊す。いずれも白の木綿糸に針で刺し、末端は青リンゴのつるに結び、重りとしている。例年であれば青リンゴは購入していたが、今年は家で採れたものを使用した。トウロウと盆センベイは購入したものである。トウロウの紙テープを取り外して、2個1対になっているものを1個ずつ使用する。現在はB氏の息子の嫁(C氏)がこれらの飾りをこしらえている。C氏によれば、集落ではかっぱえびせん、ササギを糸で通して吊す人もあるが、今は少なくなったという。「他では派手に飾ってる人もいるけど、ワイほうはもう、シンプルにこれだけ」だと語る。これらに加え、集落の寺院(円流寺)からいただいたお札3枚と、五如来幡(施餓鬼幡)を並べてつるす。五如来幡には、右から南無多宝如来、南無妙色身如来、南無甘露王如来、南無廣博身如来、南無離怖畏如来と記される。これをC氏は「ハタ」といっている。



図7 東通村砂子又 B家

・供物 昔はブドケバ(ブドウの葉)に、赤飯、煮染め、カボチャ、キュウリの酢の物など7~8品を供えた。10年ほど前からブドケバをやめ、折り詰めに変えた。16日の午後には、供物をコモに入れて川に流す。これを「タナ下ろし」という。

【屋外の棚】

・墓参 13日午前墓参し、他の日には参らない。墓前の盆棚を「タナ」と呼ぶ。木を組んでタナを作ったのは30年ほど前まで、現在は作る家はない。一方、両氏の出身集落である老部(おいっぺ)では、現在もタナも作っているという。老部では新暦8月14日~16日の3日間、毎日ホゲをする。——B氏「今はもうタナかがねもんな。棒採ってさ、棒で組んであったもんだもの。30年めがらもうやんねな」。C氏「ワイが来てがら、何年がやったがなあ。ワイはあ40年近いして来てがら。」

・供物 かつてはコモを編み、山から採ってきたブドケバに赤飯や煮しめを供えた。現在はブドケバは使わず、折詰の容器を使っている。——B氏「そご(ブドケバ)さ赤飯とか、煮染めとか、手向けて。今もう折り詰めにして。山がらブドウのケバ採って来て。それさ上げだもんだの。今それなもねんだ。」

D氏 昭和44(1969)年 砂子又生まれ、女性

D氏は現在、他村で暮らしているが、母の世話をするために盆のあいだ実家に戻ってきている。

【屋内の棚】

・盆棚 吊りかたの手本は特にないが、明治43(1910)年生まれの祖母の方法をまねている。5本の糸に3種の供物をつなぎ、仏前にすだれのように吊す。糸でつなぐ供物の順番は、各家庭で異なる。D氏は、盆センベイ、トウロウ、小リンゴの3種を用いる。盆センベイの色の順序を統一し、上から順に緑・赤・黄の三色を配列している。それらの盆センベイの間に、紙テープが

ついたままのトウロウを、やはり色の統一を意識して1対ずつ、吊り下げている。最下部には、小さな青リンゴを2つずつ吊るし、おもりとしている。

D氏は今日(8月13日)を含めた盆の期間中、嫁ぎ先から戻り、実家の世話をしにきた。この盆棚もD氏自身が用意したものであるが、嫁ぎ先では仏壇の前に横に紐を張ってトウロウを掛けるだけの形式である。この棚と供物全体を総称して「トウロウ」といつている。近所の人から「トウロウ飾った?」と聞かれる。トウロウは12日の夜に用意する。

【屋外の棚】

- ・墓参 13日の午前に墓参りする。
- ・供物 昔はヤマブドウの葉にのせて食物を供えた。コモの上にブドウの葉をのせて用いたのは小学生の頃(昭和50年代前半ころ)までである。近年はプラスチックの折詰を使用している。昨年までは、折詰の中にブドウの葉を敷き、煮染めなどをのせて詰めていたが、今年はブドウの葉がとれなかったので、シルバーのおかずカップ(アルミホイル)で代用した。
- ・棚流し 16日に取り外して川に流したが、今はゴミとして捨てている。
- ・その他 当集落に住む80代女性によると、「昔はいろいろ吊す形で仏壇を飾っていたが、かなり前にやめた」という。この集落では、糸にさまざまな供物を吊す型式の棚づくりをおこなう家は減少傾向にあると感じられた。



図8 東通村砂子又 D家

c.老部(東通村)

東通村太平洋岸の南端部に位置し、集落は海岸線沿いに形成されている。北は小老部川を境に小田野沢、南に白糠集落と接する。当村は白糠の支村である98)。

E氏 1962(昭和37)年 老部生まれ 男性 およびその夫人F氏と娘

【屋外の棚】

- ・盆棚 現在は、サンデー(八戸市に本社を置くホームセンターのむつ市苫生店を指す)やマエダデパート(むつ市にあるスーパーマーケットを核とした複合施設)で売っている台を使用して「タナ」にする人もいる(むつ市まで買いに行く)。棚には1対の柳の枝を立てる。若い世代ではテマヒマをかけることを嫌うので、小皿に盆センベイを上げて済ませている。F氏の出身地であるむつ市内では、墓に棚を作ることはないという。——E氏「やっているとごもあるけど今簡素化して、だんだんほれ、わけえものにこの引き継がれていぐがら、わけえものそういうテマヒマつうがめんどくさがって。そういうのは小皿に煎餅ど上げてやっています。うちもそうやっています。」F氏「うちのほうは田名部(むつ市旧市街)だからこういうのはないですね。」
- ・墓参 13日の昼頃に墓参りしている。テラコ(無住の庵寺)にも上げる。
- ・供物 米にオジャッパ(お茶の葉)を入れたものを「アラレッコ」という。これを2~3回箸で「チョイチョイ」と撒き、拝んだのち、地蔵の前に「捨てる」(当事者の表現)。地蔵の前にはアラレッコを「捨てる」ための容器が備えられている。

G氏 1955(昭和30)年 老部生まれ 女性

G氏は老部で生まれ育ち、嫁ぎ先も同地である。なおG氏はI氏(後述)の娘。

【屋内の棚】

- ・盆棚 仏壇の中央に盆提灯を一つ下げ、仏壇の前を横断するようにビニール紐を1本わたし、供物をつないだ糸を5本、すだねのようにかける。仏壇の前にわたす横紐は、一方は梁、他方は突き出た神棚の端にそれぞれ釘を刺して結びつける。糸でつなぐ供物は上から順に、ハマナスの実、ササゲ、盆センベイ、トウロウ、ハマナスの実、さやインゲン、盆センベイ、小リンゴ、提灯である。トウロウは既成品に付属する紙テープをとらずに2個1対で結びつける。盆センベイは1つの糸につき2枚結びつけられるが、上方の盆センベイは、赤と黄色、下方は緑と黄色で、5本を吊るした時に隣り合う色が互い違いになるように細かな配慮がなされている。下端に結びつけられたプラスチック製のミニ提灯の色も、吊るした時に真ん中に桃色、その両側に赤色、その両側に緑色となるように配慮されている。使用される供物の色は、赤、黄、緑、白を基本としている。これらの供物を吊すのは13日である。
- ・墓参 13日に盆棚を作ったのち、買い物をする。14日の朝(7:00-7:30)に墓参りをしてからテラ(無住の庵寺)へ参り、家の仏壇や神棚に供えたのち、朝食をとる。15日も同じ。16日は朝の墓参りが済むとタナを取り払う。墓にあげたものは家の中に入れないうという。あげたものをその場で必ず1つ何か食べる。例年であれば、テラの位牌堂に僧侶が来て経をあげるが、今年は新型コ

コロナウイルスの流行により中止になった。

【屋外の棚】

- ・盆棚 集落の共同墓地は、かつては海沿いのテラに隣接した場所にあった。昔は墓前のタナにも糸をかけて供物を吊していた。G氏によると、I～II型(p.135,図73)の盆棚がオーソドックスな形であるという。柳は山から、ケバ(ブドケバ)は自宅から、それぞれ自分で採って用意する。ブドウの葉には殺菌作用があるので供物の容器として適しているのだという。
- ・ホゲサラエ G氏が子どものころは、供物をアルマイトの弁当箱に入れて貰うために、墓地をまわった。もらう供物の多くは赤飯であった。——「昔は私たち子どものころは、アルマイトの弁当に、お墓にあがった赤飯を入れてあつめてもらってたもんなんですよ。ほとんど(もらうのは)赤飯だったのかな。」
- ・その他 新仏があるときは何もしない。上げものも、飾りも一切しない。

H氏 1950(昭和25)年 上北町生まれ 老部在住 女性

H氏は昭和44(1969)年に老部に嫁いだ。

【屋内の棚】

・盆棚 棚に吊す供物の順番に決まりはなく、自由である。H氏の場合、吊すための「仕掛け」を、盆以外の期間も取り払わずに常設している。その仕掛けとは、緑色のビニールで巻かれた針金を天井付近に横に一本わたし、先をフック状に曲げた同じ針金を等間隔で5本配置したものである。盆中は、この針金5本それぞれに、供物を結びつけた糸をつるす。設置の手間や糸同士の間隔をその都度測る手間がいらず、非常に合理的で工夫されている。H氏のご主人が考案し設置したものだという。糸に結びつけられた供物は上から、盆センベイ、ハマナスの実、さやインゲン、トウロウ、盆センベイ、ハマナスの実、さやインゲン、トウロウ、スナック菓子、ミニゼリーである。隣り合う糸に吊された供物の色が相互に異なるように配列されている。糸の最下部に結ばれたスナック菓子の袋の色調は、やはり緑系統と赤系統が交互になるように配置されている。ここでは、カルビー「サッポロポテト」の「つぶつぶベジタブル」(緑系統)と、「バーベQあじ」(赤系統)の5連パックの1ケずつを切り離し、2種類を交互に配置している。トウロウは、既成の紙テープをとらずに2個1対を糸に結びつけている。スナック菓子に隠れて見えにくい、糸の末端部にはミニゼリーが結ばれている。これは糸を張るためのおもりを兼ねており、かつてその役目を担っていたのは青い小リンゴであった。ミニゼリーの利用は小リンゴが手に入りやすくなって以後のことである。つまり、ミニゼリーは小リンゴから変化(進化)したものである。



図9 東通村老部 H家

昔から、ササゲ、ハマナス、盆センベイを吊していたが、その他のものは、H氏の代になってからの新しい追加である。H氏が嫁いだ昭和44(1969)年頃はトウロウが販売されておらず、トウロウは新しく追加されたものだという。赤や緑のスナック菓子のパッケージは、ハマナスの赤や、ササゲや小リンゴの青に対応しており、旧来の供物の色彩感覚が反映されている。——「その順番とか、吊すのは、そこのウチのめいめいのアレで。何をやらなきゃなんないってのはないの。くわしくしゃべれば、このお菓子(ミニゼリー)はね、昔は青いヒメリンゴのツルこついだの、ごごさ吊してあったの。それが重みがあるがら。引っ張るごどで、ピツとこう飾りが。つるささるってアレで。でももうリンゴがながながないごどで。こういう感じで。一応。きれいに緑とがアガどがつて。」(トウロウは)新しいんです。これはこの頃、出たアレだね。」

なお、H氏の出身地である上北町ではこのような飾りをおこなわないという。

I氏 1934(昭和9)年 老部生まれ 男性 およびJ氏 1936(昭和11)年 老部生まれ 女性

I・J両氏は夫婦で、ともに老部で生まれ育った。なお、前出G氏は両氏の娘である。

【屋内の棚】

・盆棚 この方式の棚のことを単に「飾り」「お盆の飾り」といい、特別な呼称はないという。供物を吊す理由についてJ氏は、「仏さんと呼ぶ意味でやっている」「ナスやキュウリの牛馬の飾りの代わりだと思ふ」と説明する。J氏は、仏壇の前に盆センベイを吊す光景は、昭和11(1936)年に当地に生まれて物心ついた頃から見えており、嫁いだあとも同様にしている。ハマナス、インゲン、煎餅、青リンゴ、トウロウなどを吊すのはすべて昔からの習わしだという。吊す際には、下のほうが重くなるように重心を考えて供物(飾り)を組む。夏場は暑くなり窓を開放するため、風が入っても揺れないようにするためであるという。盆センベイやトウロウはむつ市内か六ヶ所村泊で既製品を購入する。車で40分かけてむつ市内へ行く人が多いという。——「私が覚えたときから(物心ついたときから)、そうやって(供物を吊して)います。最中のトウロウも。別に決まってないけど、私は下のほうが重くなるよ

うに、そうすれば、多少風が入っても、あの、2～3日前みたいに33℃ってなっても、風入れなくちゃならないから、それが余にも揺れないように、重みを下にしてやっています。」

・供物 14日の朝・夕・昼には、図11のような膳を供える。「漬物」は、キューリや白カブの漬物である。J氏によると、カガミテン(真四角に切ったところてん)と豆もやしは「昔からの」供物で、前者は「仏さんの鏡」であるという。また、就寝前にはおやつとして何かを供える。15日の朝夕は前日と同様である。16日の朝のみ、赤飯を白飯にする。供物の容器としてブドウの葉を利用する。昔は便利な入れ物がなかったからだというのが、今でもブドウの葉にこだわりがあり、折詰めを購入したことはない。ただし、ブドケバの表面は清潔ではないので、裏面を使うことにしている。カガミテンや豆もやし、赤飯、漬物、豆などの食べ物をブドケバに載せ、それを——「昔なかったものね、いろんな入れ物がね。必ず上のほうを上にして。表だといろんなものがついてるからね。」「私は折り詰めを買ったことはない。自分がやれなくなったら仕方ないけど。今でもブドウの葉っぱ(ブドケバ)にお赤飯を入れてお供えます。墓にも位牌堂にも、そういう風にお供えます。」

【屋外の棚】

・墓参 墓に参ることを「ホガイに行く」という。墓のタナは13日に作り、その日の夕方に線香とろうそくをあげてお参りする。子どもたちが多い時代には、花火をあげていた。——「子どもたちが多いときは(花火を)よぐやっただな。持ってってなあ。」

14日以降の墓参は毎朝、朝食を食べる前に赴く。——「今朝も6時ころ行ったなあ。朝ご飯自分たちが食べる前に行くの。朝ご飯前に。」

・墓前飲食 昔は、赤飯を重箱に入れて墓に持参した。子どもたちは大きなブドケバを持って墓所をまわり、親戚筋から重箱から赤飯を分けてもらい、家に持ち帰って食べた。一度墓に供えたものではなく、重箱から直接分けてもらった。I氏の娘であるG氏(前出)の世代では、ブドケバではなく、アルマイトの弁当に入れてもらった。赤飯をもらって歩く行為については特別な呼称はない。しかし現在では赤飯を喜ぶ子どもは少なく、あえて供え物を食べることもあまりないので、親戚関係のある8戸分の赤飯を少量ずつ重箱に入れて、供えて歩くように変わった。

今は親戚関係のある8軒分を重箱の中に少しずつ入れて、盆棚にそれぞれの墓に供えて歩く。今は供えたものを持ってきて食べることは殆どないので、多く供えても無駄になることから、少量を入れて供える。量を少なくするには、高齢のために重いものは敬遠するという理由もある。供えたものはすべて持ち帰る。——J氏「私が子どもの頃は、ブドケバはもっと大きい葉っぱだったの。お墓に持って行けば年寄りだちがこのブドウの葉っぱを、お墓のタナを作ってるでしょ。そのタナの上にこれを反対にして置けば、年寄りのおばあさんたちが赤飯を入れてくれるのが、めいめいのお墓のところに、柳を建ててお花をつけて、柳のところに四本脚をつけたタナっていうのがつくってあるでしょ。それに、供えるわけ。いくらか親戚関係のある人たちが、赤飯を入れてくれるの。だからまだ、おおい葉っぱだったの。」「当時私らが小学校あがった当時は、みんなそれをウチへ持って帰って食べたもんだけど、今はお赤飯食べる人って数少ないと思って。」

・水の子 米に茶葉を混ぜた「アラレッコ」「アラネ」を持参する。和尚さんにも「アラレッコは忘れないでよ」と言われる。自分の家の墓にも撒くが、六地藏さんにもわけてやる。撒く理由についてJ氏は「わからない。それは和尚さんでなければわからない。昔からやってるからやっている。アラネと、お賽銭を忘れないで持って行くことって、聞いているから。墓所の入口にある六地藏の赤い袋にサイセンを、一人に一つずつ、10円、100円などを入れる」と語る。

・タナ流し

16日に供物を先祖とともに送ることを「タナ流し」という。集落のはずれ流れる老部川にかかる橋から「ポンポンと」投げて流したが、今は禁止されている。昔は川の水量が多かったが、水が少なくなったことも理由のひとつである。海辺で焚き上げることも禁じられている。

K氏 1962(昭和37)年 老部生まれ 白糠在住 女性

K氏は東通村白糠へ嫁ぎ、現在は白糠(L家)で暮らしている。

【屋外の棚】

・盆棚 K氏の出身地である老部では、かつては川端にあった製材所から「キバツ」(木端)をもらい、盆棚を作った。「キバツ」



図10 東通村老部1家



図11 屋内に供える膳

があるので、材料にそれほど苦労せずにタナを作ることができた。現在では好んで面倒なことをする人もおらず、四角いビールの通箱を逆さまにして台の代わりにするなど簡素化の傾向がみられるという。「ホントのムガシ式」(K氏にとっての本来の形)のものは少なくなったと語る。——「柳こへれねあの棚こへれね人だ[柳を採ってきて供えることのできない人や、例の盆棚を作れない人であれば]、ビールの箱だのなんが台持ってって台の上さ(供えている)。「昔あの川のどごさ製材所あったたどごで、あの製材所があのキバヅもらってって、老部のふとどこへだんだいな[老部集落の人であれば、自ら盆棚を作ったものです]。キバヅほら製材所やっちゃったべしえ老部[老部では、製材所があって木の切れ端があったでしょう]、あら川のどごさあのハガ[あの老部川のところに墓があってね]、ハガのタナここへるとば製材所さ行ってキバヅみなもらってな[墓の盆棚を作るときには、製材所に行って木の切れ端を貰って来て、みんな作ったものです]。あのそれごそとちやどこう簡単にこへであたの台こな[そうだねえ、男性たちがあのような台を簡単に作ったものですよ]。だどごで苦になねふたべたて[だから面倒だなどと感じなかったでしょうけれど]、今の人ど器用なふともねべし[今の人たちはそれほど器用ではないでしょうし]、ハ、ビールのハゴどがなんかこう四角い、ケースみたのよひくりがえして台のかわりにしてハ[やれビールの箱など四角いケースのようなものをひっくり返して台のかわりにしてねえ]、みな簡素化してホントのムガシ式数すぐねごた[みんな簡素化されてしまって、本当の昔からのやり方は少なくなってしまうと思いますよ]。「(老部では)年いってマメし人だば(墓前に柳の枝を立てることを)やってるべな」。

・その他 かつて(昭和40年代前半ころ)老部集落では、家々の前にも柳の木を立て、その枝に紙の提灯を吊していたという。——「昔は、老部では家にも柳を立てて枝に紙のちょうちんを吊していた。自分が本当の子どもころ。」「今やってる人ねごたな、わいどでもてげ省略してるして」。

老部の墓地

・テラコ

下北地方には「テラコ」(テラ、アンデラ)と呼ばれる集会所がある。多くは集落の共同墓地に関連して設置されており、祭祀の対象となる神仏や位牌が安置され、地蔵講などの宗教的儀礼や行事がおこなわれる。その多くは集落の年配の女性たちによって管理運営されている⁹⁹⁾。

老部の「テラコ」は集落のはずれの海に近い場所にある。かつてはテラコに隣接して墓地があったが、墓地は集落の外へ移動した。平成2年2月に新築された建物はシンプルな作りで、外見からは信仰に関わる建物であるようには見えない。玄関には「老部墓地待休所」の木製看板が掲げられている。内部は地蔵の石像をとり囲むように、三方の壁に3段に配置された正方形の棚に各家の位牌が並べられ、供物が山のように積み上げられている。折詰(法界折)の上にブドケバ(ブドウの葉)を敷いて供える人も目立つ。同所では定期的に女性の集会在催される。「老婆会」(現在は「老母会」)¹⁰⁰⁾といい、60代の女性たちが中心の講である。老婆会では、地蔵の着物を作り、盆と正月に新しい着物を着せかえるという。かつてはネンブツも行っていた。例年であれば、盆の14日に僧侶を呼んで供養していたが、2020年は新型コロナウイルスの流行のため中止した(以上地域住民の話)。年間の行事は次のとおり。

・1月1日 神楽門打ち祈禱 ▶1月2日 消防団防火御札回し ▶1月7日 お供えを下ろす ▶1月15日 婦人会門打ち祈禱
 ▶1月20日 お供えを下ろす ▶2月15日 涅槃 ▶3月23日 彼岸明け ▶5月8日 お釈迦様の日 ▶7月 地蔵様の着物を縫う
 ▶8月6日 地蔵様に着物を着せる ▶8月13日 高坏にジュースを上げる ▶8月16日 お盆の後片付け ▶9月26日 彼岸明け
 ▶11月24日 ダイソコ粥 ▶12月24日 大掃除 ▶12月30日 地蔵様の年越し



図12 テラコ外観



図13 内部



図14 ブドケバを用いた供物の一例

・共同墓地

かつて集落北東端の海辺にあったが、現在は集落北西の高台に移転した。区画整理された墓地には、墓石が整然と並び、墓の様式も石製の供物台を備えた新しいものが多い。集落からの徒歩圏内にはあるが、村外れにあることから、車で訪れる人も多い。

以下に掲げる写真は、集落の墓地の様子と、各家庭で用意した盆棚を記録したものである。盆棚は、墓地のすべての墓と盆棚を記録したなかから、代表的なものを様式別に挙げる。墓石に記される家名や家紋、家印などプライバシーに関する情報はすべて加工(モザイク処理)している。



図15 墓地



図16 墓地



図17 地蔵とアラレコ(手前の箱)

・棚

製材で作った棚



図18 盆棚(木材・自製)



図19 盆棚(木材・自製)



図20 盆棚(木材・自製)



図21 盆棚(木材・自製)

聞き取りによると、集落の人々はこの形式が旧来の形に最も近いものであると考えている。かつてのように山から採取した自然木を組んだものは現在みあたらないが、みずからの手で作るという習慣を伝えている。既製品を利用した棚の場合には、手前に1対のヤナギを取り付けるものが比較的少ないが、これらの手作りの棚にはヤナギが取り付けられているものが多い。コモも既製品ではなく、ガツキで作った手作りのものを利用する傾向がみられる。

縁台やテーブルを利用した棚



図22 盆棚(縁台・転用)



図23 盆棚(縁台・転用)



図24 盆棚(机・加工転用)



図25 盆棚(踏台・転用)

聞き取りによると、近年はホームセンターから購入した机や台を利用する人が増えているという。六ヶ所村泊やむつ市のホームセンターから購入するという。そのまま利用する 경우가多いが、石段にあわせて奥側の2本の脚を切り取ったもの(図24)も散見される。供物台がありながら利用せず、臨時の棚を設置するという行為が目される(図23, 24)。

飲料通箱等を利用した棚



図26 盆棚(通箱・転用)



図27 盆棚(通箱・転用)



図28 盆棚(通箱・転用)



図29 盆棚(収穫カゴ・転用)

瓶ビールの通箱(図26,27,28)や収穫用のプラカゴ(図29)を利用したものも散見される。通箱やカゴの底は編み目状になっており、コモを敷き供物を供えたときの通気性がよいという利点がある。また、編み目状の格子はヤナギを立てることに役立つ。持ち運びが容易で耐久性があり、臨時的の棚として非常に理に適っている。本来が運搬用であることから、中にコモや供物などを入れて運ぶこともでき、非常に合理的である。

薄板やブロック、コモだけの棚



図30 盆棚(天板・加工転用)



図31 盆棚(ブロック・転用)



図32 盆棚(コモのみ)



図33 盆棚(コモのみ)

薄板に桁をつけて多少高くしたもの(図30)、ブロックを利用したもの(図31)がみられる。全体数に比して数は非常に少ない。また、直置きする場合には、コモを敷くことでそこが「棚」であることを示している。コモすら敷かずに直接供物を置くというケースはみられない。墓石に供物を置く場所がありながら、あえてそれを利用せずに、コモを手前に置いて供物を捧げるという行為が目される(図32,33)。すなわち、棚の「臨時性」「特別性」が演出されている。

d.白糠(東通村)

東通村南端に位置し、南は大明神沢を境に六ヶ所村泊、北は老部に続く。山々が背後に迫り、段丘となっている101)。

L氏 1932(昭和7)年 白糠生まれ 男性、および L氏の息子の嫁K氏 1962(昭和37)年 老部生まれ 女性

【屋内の棚】

・盆棚 棚づくりはK氏がおこなう。K氏の出身地(老部)の方法ではなく、L氏の妻(昭和11年生れ)＝義母から教えられた方法で作る。見よう見まねで覚えたという。つまり、当地(白糠)で伝えられた方法である。仏前の供物など総称して「盆棚」という。吊す供物を「盆棚飾り」と称する。K氏によると、現在の白糠では屋内の棚を作る家と作らない家があり、省略される傾向にあるという。また、現在K氏によって作られている棚(図34)は省略されたものであり、本来ならば足すべきものが多いという。

K氏によって作られるL家の盆棚は、仏壇の前の鴨居と鴨居の間に竹竿を渡し、等間隔で7本の糸を吊したものである。糸には5種類の供物が結ばれている。ササゲ、トウロウ、盆センパイ、スナック菓子、ミニゼリーである。他の地域の他家の例と異なり、ここでは結びつける供物の順番に厳密な規則性はみられないが、おおむね上方2段はササゲとトウロウが結ばれ、中間には袋菓子、下方には盆センパイとトウロウ、末端には袋菓子とミニゼリーが結ばれている。ミニゼリーは糸を張るためのおもりの役目を果たしている。袋菓子は、ここではスナック菓子以外の菓子も利用されている。ポケモンの絵が描かれた明治「おとつと

うすしお味」やカルビーの「ベジたべる」などはスナック菓子であり、そのほか「アンパンマンのミニビスケット」や「つぶグミ」などが用いられている。これらは、最終日に子どもたちにあげるために、子どもの嗜好にあわせた結果であるという。

K氏によると、かつては袋菓子は用いず、ハマナスの実や盆センバイを用い、糸の末端には小さなリングを結んだという。盆が終わるとそれらを取って捨てていたが、今は子どもたちにあげている。飾り方については、義母から受け継いだ。——「下はホントムガシはこれリングちっちゃいあらリングな、ぶらさげじゃったもんな[末端には、昔は小さなりんごをぶら下げていたんですよ。むがしこの下さぶらさげのリングぶらさげじゃったもんな[昔は、下のほうにりんごをぶら下げていたんですよ。]。リングのあれちっちゃいりんごあべしえ[りんごといいても、小さなりんごがあるでしょう]。

あれ下さこうぶらさげでこやちやたもんな[あれを下のほうにぶらさげていたんですよ]。でハマナスもつけじゃたけな[そして、ハマナスも吊していたんですよ]。リングぶらさげあれしながら、あれけきよくホドゲサマなにが意味あんだけな[りんごをぶらさげて飾っていたけど、あれは結局、仏様に対する何かの意味があったのかな]」。

・供物 かつてはキュウリとナスの牛馬を供えていたが、今は面倒なので省略している。また、赤飯やおかずを、ブドケバに載せて皿代わりにして供えたが、最近はやらなくなった。——「あれが皿の代わりになって、ケンバの上さ赤飯どがおかずどがあげで出したったの[ブドウの葉、あれが皿のかわりになって、葉の上に赤飯やおかずなどをのせて供えていたんです]。ブドケバの上さママあげで[ブドウの葉の上にご飯をのせて]、ホントだんだばって、ブドケバそれこそ葉っぱな[ブドウの葉を用いるのが本来なんですけどね]。ワイだちいまは、べづだの、それさやっちゃったんだばて、最近やらない[私たちは今は別の容器を使って供えていて、最近ブドウの葉を使わないんです]」。

【屋外の棚】

・盆棚 K氏によれば、白糠では従来から墓前に棚を作らないのだという。その理由は、この地が平地に乏しく山がちだからだという。白糠ではヤナギを立てることもない。——「(K氏の出身地である老部では)作ってるどごと作ってねどごとあるべたてみなハ、世代交代してハ、(老部でも)省略してきてるのよだんだんな。(それに対して)棚はもともと白糠は棚はつくねだいな。(老部では)結局テラそのものがハガシヨそのものが平らだどごとでだべさ。平地さでぎでるして。(それに対して)シラヌガの場合は山だどごとで(棚をつくらないのだと思う)」

・墓参 13日午前盆棚を飾り付ける。午後から仏様を迎え入れ、夕方に墓参する。14日・15日は朝に墓参する。

・タナ流し 16日の朝に墓参したのち、供物や飾りを片付け、昼から「タナ流し」をする。盆棚の飾りを取ったり、タナを流したりする際には、仏前に素麺や腹持ちのするコビリ(間食)を与えてから、「あの世に帰って下さい」という気持ちで流す。昔は海に流して仏様を戻し、お盆の行事終わりという意識だった。今は海に捨てるのと叱られるので、新聞に包んで捨てている。その夜には、例年であれば盆踊りが開かれるが、今年(2020年)は新型コロナの流行で中止になった。——「棚流しする前も、仏前の飾りを取り去る前も、仏さま素麺どが、腹持ちする、まずコビリていうが、それ食べさせながら、棚かたづけで、あの世さ帰って下さいっ感じで海さ流してやって、それではあお盆の行事終わり。そのあどまず部落で、コロナがながったら盆踊り大会どが」

・その他 墓のことをこのあたりでは「ヤントラ」といい、便所は「コガ」というのだと、L氏が教えてくれた。また、L家では玄関先と小屋などの出入り口すべてに、ショウブとヨモギを束ねたものが吊り下げられているが、L氏によると病気を除けるために、毎年、旧暦5月5日に掲げるのだという。旧暦でおこなうのは、自然に生えているショウブを使うため、新暦だとまだ生えていないからである。L氏はこれを「マジネコ」(まじないっこ)だという。その日はショウブ湯とって、ショウブとヨモギを入れたお湯にも浸かる。——「病気アレするように。玄関の角さ、入り口ど、小屋の玄関どがとにかく出入りすどごとに、みな入ってこねよにする。うん。」

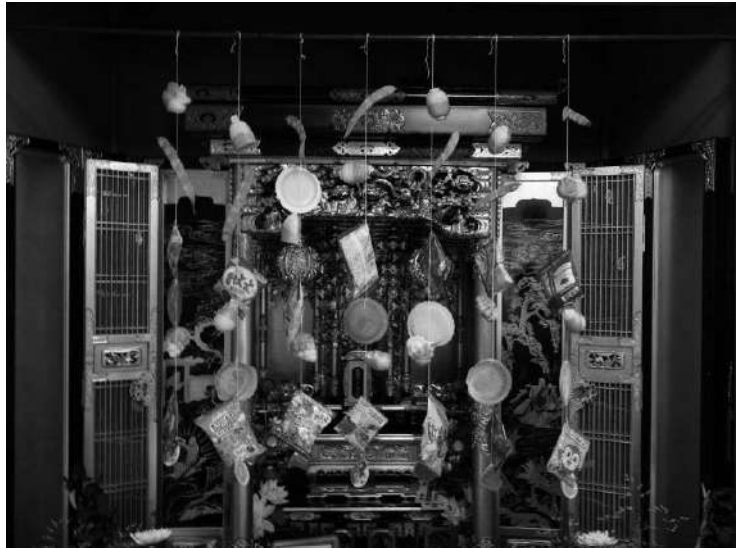


図34 盆棚(東通村白糠 L家)

e. 泊(六ヶ所村)

六ヶ所村最北端の集落。自然の良港に恵まれ、漁業が盛んであるが、山が海岸に迫る地形のため耕地が狭く、気候が寒冷であることから農業は畑作が自給的に行われてきた。集落は浜沿いに段丘の上下に並ぶ(102)。盆は7月7日に赤飯を炊き仏壇に供えるとともに「七ゲリ飯食って七ゲリ水浴びする」といって赤飯を食べる。7月13日の夕方、墓参のときに灯明をつけて拝むが、門口で火は焚かない。7月14-15日の朝に墓参する。オコワ、煮しめ(ふき、わらび、しいたけ、とうふ、こんにゃく、かぼち

や、焼き麩など)、アラネコ(墓前へ行ってから、土瓶に入れた茶を米にかけて用意)などを持参する。アラネコは二合どんぶりに入れ、家の墓と親戚の墓にかける。墓を一巡したのち、墓所の入口にある六地藏に箸であげものをする。箸で虫歯や痣をこすると治るといふ。一方、仏壇の前には、カナイトでハマナス、盆センベイ、小りんご、ササゲをつないだものを、仏壇前に渡した横木に7-13本下げる。横棒にはホソメコンブやそうめんを掛ける。ホゲイダナ(タナコ)は、材料をとってきて13日の午後に家の仏壇の前と墓前に作る。墓前のホゲイダナは墓参の人が立ったまま参拝できるようにヒバの厚板で3尺余の高いものを作る。その上にカヤ(ススキ)を折り曲げて薄いコバで上下を挟み込んで棚を作り、ケバを敷いて供物をあげた。四隅に立てるヒバの棒の先に盆花を束ねてゆわえる。「この丈の高いホゲイダナがずらり並んで墓所は花壇のようなはなやかさである。このように四本の長い棒を使うと、お盆が過ぎて墓所の後片づけをする時に、その棒の処理が大変だといふので、最近是一本の棒に板の台を打ち付けたホゲイダナが見えて来ている」。16日にはホドケオグリする。ホゲイダナを包み昆布で縛って海に投げた¹⁰³⁾。

M氏 1942(昭和17)年 泊生まれ 男性、およびその妻 N氏 女性

【屋外の棚】

・盆棚 現在はタナを作らないとM氏は言う。石塔が立派で、供物台がついているので、誰も作らないのだといふ。ただし、これはM氏の認識で、実際に墓地に行くと石の供物台とは別にタナを据えている家が2~3割ある。つまり、M氏は、既成の箱やテーブルなどを用いた盆タナを、盆タナとは見做していないのである。

・墓参 13日の晩、14日・15日の朝と晩に墓参する。晩の墓参は日が暮れてから行く。昔は墓所で花火を盛大におこなったが、現在は子どもが少ないこともあり、やらなくなった。16日は寺に参る。——N氏「ばげ今がら行くの[夕方、これから行くところです]」。M氏「花火やったもの。孫ど花火やるの」。N氏「なもいま誰もやってねえ」。M氏「ムガシの人。だも今の人やねえ[やったのは昔です。今の人は誰もやりませんよ]」。N氏「子どものねえヨノナガだって[子どもが少ない時代ですからね]」。M氏「(昔は結構派手に)やったけどなも[やりましたが、今は何も]」。N氏「第一、子どもどねぐなつたすけな[第一に、子どもたちがいなくなったからね]」。

【屋内の棚】

・盆棚 M家では、盆中、仏壇を殆ど空っぽにして、仏壇の前に設置した大きな平机の上に仏像と位牌を並べる。ずらりと並んだ位牌の前にガツキで作ったコモを敷き、果物を中心としたさまざまな供物を並べる。平机の両脇に据えた花瓶に盆花をいける。平机を大きく跨ぐように、手製の木枠が置かれている。この木枠に供物を吊ることをM氏の妻N氏は、「盆のタナを吊り下げる」といふ。つまりこの木枠が「盆棚」である。木枠の横木には、11個の真鍮製のフックが下向きに取り付けられ、それぞれから、糸で供物が吊されている。一本の糸に同じ種類の菓子が吊される。左から2本目の糸には、チューブ入りゼリーが9本、3本目の糸には「サッポロポテつぶつぶベジタブル」の5連小パック、5本目には「ベビースターラーメン」の5連パック、6本目には果汁グミな



図35 盆棚(六ヶ所村泊 M家) 右手後方の仏壇は空である

などのキャンディやポテトチップの大袋、7本目には不二家の「パラソルチョコレート」が5本、9本目には「くだもの屋さんグミ」、10本目には「ガブリチュウ」、11本目には「くだもの屋さんグミ」が吊されている。聞き取り当日は、すでに子どもたちがお菓子を取ったあとで、ところどころ菓子が外されていた。それらの菓子と並んで、左から4本目と8本目にはハマナスの実が数珠状につなげられ、吊されている。

N氏によれば、かつては極彩色の盆センベイや小さなりんごなどを吊したものであるが、今はほとんどそのようなことをする人はいないといふ。しかしN氏には孫がいるので、何も吊さないのは盆らしくないし、子どもたちを喜ばせるために吊しているのだといふ。——「取ったのほら。切れでべ糸[子どもたちが取ったのよ。ほら、糸が切れているでしょう]。なも今むがしみに吊るしねいで少ししか吊るしねんだあ[今は昔みたいに何も吊さないで、少ししか吊さないんですよ]。ムガシあがいセンベイだのあのほらちやけりんごだの何でもつるしたったねい[昔は赤い煎餅やあの小さなりんごなど、何でもつるしていたんだよねえ。今だも吊るしねべ[今は誰も吊さないでしょう]。ただオラどお子どもどお孫どあべし盆らすぐねえどもって吊したの[でも私たちには子どもとその孫がいますから、お盆らしくないなあと思って吊したんですよ]」。

〇氏・P氏・Q氏 いずれも昭和20年代生まれ 白糠在住 女性

【屋内の棚】

・盆棚その他 泊では20年くらい前から、どこの家でもタナに供物を吊していない。昔はホソメ(昆布)を飾り、タナ流しのときにはホソメでコモの両端を縛って海に流した。キュウリやナスを牛と馬、ハマナスを数珠に見立てて供えることは、昔からおこなっている。——「それこそ、帯だってな。ホソメな。昆布いもな。あらまるって、流すどぎ昆布でまるったべたて今そういうのもねえべ。コモさくるんであげだものい昆布でこうまるって流したったの。海さ流したの。今も昆布あげで家あるごってえ。ほそなげえのこうずっとなげえので、ホソメではしはしこう縛ってほら。今もまだ習慣やってる年寄りどおいだらやってるごてえ。」

六ヶ所村泊の墓地

・墓地と棚

以下は、集落の墓地の様子と、各家庭で用意した盆棚を記録したものである。墓地のすべての盆棚を記録したうえで、そのなかから代表的なものを様式別に抽出した。墓石に記される家名や家紋、家印などプライバシーに関する情報はすべて加工(モザイク処理)している。聞き取りでは、同地区の昭和17年生まれ男性が「墓石の供物台があるので今は誰も盆棚を作らない」と証言していたが、実際には2〜3割程度ではあるが作られている。

製材で作った棚



図36 盆棚(木材・自製)



図37 盆棚(木材・自製)



図38 盆棚(木材・自製)



図39 盆棚(木材・自製)

角材や板材を組み合わせて自作したタナ(図36,37)。墓壇の形状に合わせて片足にしたり(図38)、石段の幅に合わせてスリムにしたりする工夫がみられる(図39)。既製品をそのまま利用したタナが多いなか、少数ではあるがこのような手作りのタナも散見される。

縁台やテーブルを利用した棚



図40 盆棚(テーブル・転用)



図41 盆棚(テーブル・転用)



図42 盆棚(テーブル・転用)



図43 盆棚(ラック・加工転用)

折りたたみ式の鉄脚のついた小さなテーブルをタナとして用いるのは、当地における流行のひとつである(図40,41,42)。設置・撤収と保管が容易で耐久性がある。老部(東通村)のように縁台を利用したものは当地ではみられなかったが、近いものとして、スノコ状の板を組み合わせた既製品のウッドラックを利用したタナ(図43)が見られた。

飲料通箱等を利用した棚



図44 盆棚(通箱・転用)



図45 盆棚(通箱・加工転用)



図46 盆棚(通箱・転用)



図47 盆棚(通箱・転用)

瓶ビールの通箱を利用したものが散見される。ビール瓶の通箱(図44,45)のほかに、コカコーラの小瓶やファミリーサイズ(500ミリリットル)の通箱を利用したもの(図46,47)がみられた。六ヶ所ではタナを低く作る傾向がみられるが、小瓶用の通箱はビールの通箱よりも低めであり、感覚的にちょうどよい高さなのだろう。小瓶やファミリーサイズの通箱の利用は、東通村老部ではみられなく、当地の特徴(流行)のひとつである。プラスチック製の通箱の底は編み目状になっており、コモを敷き供物を供えたときの通気性がよいという利点がある。持ち運びが容易で耐久性があり、臨時の棚として非常に理に適っている。本来が運搬用であることから、中にコモや供物などを入れて運ぶこともできることから、非常に合理的である。

空き箱を利用したタナ



図48 盆棚(木箱・転用)



図49 盆棚(木箱・転用)



図50 盆棚(木箱・転用)



図51 盆棚(スチロール箱・転用)

六ヶ所村の墓地では、タナを低く作るものが多いが、高さ15cm以下の木が用いられる場合も多い。そうめんが入っていた木箱(図50)も散見される。発泡スチロールの箱をタナとして用いるもの(図51)もみられる。

薄板やブロックの棚、コモだけの棚



図52 盆棚(板・桁付き転用)



図53 盆棚(板・桁付き加工)



図54 盆棚(コモのみ)



図55 盆棚(コモのみ)

薄板を敷いたものや薄板に桁をつけて多少高くしたもの(図52,53)がみられる。コモだけが敷かれる場合(図54,55)もあるが、コモを敷くことでそこが「棚」であることを演出している。コモすら敷かず供物を石段に置くというケースもみられる。墓石に据え付けの供物台がありながら利用せず、コモや供物を手前に置いて供物を捧げる事例からは、常設の石製供物台は盆棚の代わりにはならないという意識がうかがわれる。

f. 鶏沢・有畑 g. 百目木(横浜町)

青森県立郷土館による昭和54(1979)年の調査報告『鶏沢・有畑・浜田の民俗 調査報告書』をみると、この地域では旧暦7月7日に「井戸カキ」を行い、子どもたちは「ナナグリメシクテ、ナナグリミズアブル」(7回食事をとり、7回水浴びをする)といって夕方まで水浴びをした。夕方、盆花と赤飯を持参してホゲ(墓参)する。新仏のある家では前日にホゲする。13日に盆棚の準備をおこなうが、細かなきまりがあった。墓の盆棚には古いトバ(塔婆)の上にケバ(柏の葉)を5~6枚敷いて供物を盛った。子どもたちが食べたり、家に持ち帰ったりしたという。親類の墓を含めて7~8ヶ所をホゲして歩く人もあった。13日~20日まで、夕暮れ時以降にホゲに行くが、16日の早朝には屋内の盆棚と仏壇の飾りものと供物をカヤに包んで海に流した(「タナ流し」)。20日は「シメボン」と称して、仏壇に供物をあげ、ババ連中が墓参した。104)

以上は、40年前の記録であるが、筆者が2020年の盆に現地を訪れて確認すると様子は異なっていた。多くの家では常設の供物台に菓子や果物を置くだけで、仏壇に「飾りもの」はない。百目木の50代男性によると、墓前に供える赤飯や煮染め等は、仏壇には供えないという。トウロウは昔から用いず、まわりの家でも使っている様子を見たことがないという。同じく百目木の80代女性、90代女性ともに、昔から仏壇には飾りものをしておらず、近年になって若い世代がトウロウを吊し始めたという。有畑の50代男性、80代女性ともに、仏壇には供物のみでトウロウなどを吊すことはないという。鶏沢の60代女性も、仏壇に供物は置くが、吊すことはないという。横浜町中心部に住む50代女性2名も、仏壇にお供えはするが、吊すことはないという。ただ、中心街にある大手の日用品販売店では、トウロウと盆センベイの販売が行われていることから、需要が全くないわけではないようである。わずかに百目木の30代女性宅で、仏壇の前の1対の盆花にトウロウを2対ずつ吊り下げる例が一例確認されただけであった。盆センベイについては「横浜ではやっている人をみない」「やらない」「盆センベイは知らない」と住民は口をそろえる。



図56 墓地(有畑・鶏沢)



図57 墓地(百目木)

【屋内の棚】

・盆棚 横浜町百目木のR氏(50代男性)は、盆中でも仏壇に特別な棚を作らず供物も吊さないという。ちなみに同家は真宗ではない。煮染めなど5~6品を墓に供えるが、仏壇には供えない。昔からトウロウを供えることはなく、周囲でも見ることはないという(図58)。百目木のS氏(30代女性)も、仏壇に特別な棚をしつらえることをせず、「トウロウ」を2対ずつ、盆花にかける(図59)。他にも、特別なことは何もせず供物を供えるだけという家が2軒みられた。横浜町鶏沢のT氏(50代男性)・U氏(80代女性)・V氏60代女性のいずれも、仏壇に供物をあげるだけで、トウロウなどを飾ることはないという。



図58 盆棚(横浜町百目木 R家)



図59 盆棚(横浜町百目木 S家)

【屋外の棚】

- ・盆棚 百目木の共同墓地、有畑・鶏沢の共同墓地ともに、臨時の棚の設置は全くみられない。有畑のW氏(50代男性)によれば、墓を含めてトウロウを飾る人は周囲にいないという。
- ・タナ流し 横浜町百目木(どめき)のS氏(前出、30代女性)は、母親が健在であった数年前までは、ご飯ものをコモに包み、海に流していたという。



図60 供物(有畑・鶏沢墓地)

h.山添 i.添ノ沢 j.宇道坂(東北町)

旧甲地村の支村であった宇道坂、添ノ沢は、北東方向に流れる清水目川沿いに点在する集落。川沿いに水田が広がる。川は野辺地川と合流し、山添集落を通して、野辺地湾に注ぐ。各家の庭先には湧水を利用した洗い場がある。現在も洗濯や食品の冷却に用いられている。

青森県史民俗編ではこの地域は聞き取りの対象となっていないので、昭和63(1988)年と平成4(1992)年に75歳以上の高齢者を対象におこなった聞き取りをまとめた『東北町史』の報告から、東北町における盆行事について確認する。この聞き取りの記録では、今回筆者が訪問した地域である添ノ沢の男性(大正12年生まれ)や、近隣集落である上清水目の方々も証言していることから、参考になるとと思われる。

7月7日(「ナスカ盆」「ナスカビ」)には墓地の草刈りをする。「ナナゲリママ食ってナナゲリ浴びる」と言って赤飯を炊いた。13日には「ホガイ棚」(盆棚)を家の仏壇の前と墓前に作った。墓地の棚は厚板で作られ、約3尺の高さであった。14日朝には正装して「ホゲシ」(墓参)をおこなった。供物は、ナスとキュウリに割り箸で角と脚をつけたもの、「オゴア」(赤飯)、煮しめ、カボチャの煮付け、キュウリの酢の物、昆布、米菓子、果物である。それらを柏の葉や蓬の葉、あるいは重箱に盛り付けて供えた。供物を盛る際に用いた箸で虫歯や痣をこすると治るといわれた。13日から15日までの間、墓前と家の「ジョーマエ」(門口)で「松明かし」(迎え火)を焚いた。新仏がある家では3年間、四十八燈籠を立てた。16日は送り盆で、供物をコモに包み、山へ持って行ったり、川に流したりした。盆の期間は殺生を禁じられ、肉を食べることはできなかった。105)

W氏 1935(昭和10)年生まれ 山添在住 女性

【屋内の盆棚】

- ・盆棚 トウロウを含む供物は13日に供えた。以前は、縄を張ってトウロウを吊したが、現在では縄を張るのが面倒になり、縄に吊すことをやめ、仏壇の本尊脇に下げている(図61)。かつて、吊す供物はトウロウだけであり、果実や野菜は吊さなかった。トウロウを吊すのは、先祖の明かりのためだという。昔はキュウリとナスの牛馬を作ったが、現在は作らない。——「うん。んだたて面倒くさいもの。やるってば。あげておいで。ムガシはやったけど今やってね。ムガシはハアまんずの。年行った人だち、やったんでねえの。だけど今、ただ、せて[そうやって]あげで。今はただ掛けておいで。ちょうちんど[複数のトウロウを]。(昔は)ナワっこでやってだ[縄を張って吊していました]。』

- ・迎え火 昔は焚いたが、今はやらない。

X氏 1959(昭和34)年 山添生まれ 男性

【屋外の棚】

- ・盆棚 墓石と一体になった常設の供物台を用いる。「銀パック」(プラスチック製の弁当容器で、外側が朱色、内側が銀色のもの)にトウロウを入れ、墓前に供える。
- ・墓前飲食 墓前で宴を開くことは昔からなかったが、墓のまわりに適当に座り、供物を食べた。それも昭和の頃までで、近年はあまり飲食せず30分以内で帰る。近頃は、カラスに荒らされぬよう供物は持ち帰りを基本とし、菓子と飲み物だけを置いて帰る。



図61 盆棚(東北町山添 X家)

【屋内の棚】

- ・盆棚 仏壇を用いる。「トウロウ」その他を吊すことはない(トウロウは、「銀パック」[折詰]に入れて墓前に供える)。

東北町山添の墓地

・墓地と棚



図62 不明



図63 盆棚(板・転用)



図64 盆棚(常設供物台の利用)



図65 盆棚(常設供物台の利用)

当地の墓地では、X氏が語るように盆棚は非常にシンプルであり、常設の供物台を用いているものも多い。図63は板一枚を敷いた盆棚であり、図64,65は墓石に付属する常設の供物台を盆棚として用いる事例である。供物の下にコモを敷かないという省略傾向もみられる。また、法界折には、生ものかわりに「トウロウ」を詰めることで、鳥獣類による供物の散乱を防いでいる(図65、X家の墓)。

Y氏 1932(昭和7)年生まれ

添ノ沢在住 女性

【屋外の棚】

・墓参 8月13日の朝におこなう。供物は引き上げる。

【屋内の棚】

・盆棚 12日に設置した。今年は「早めに飾った」のだという。仏壇の左右に竹を2本立て、両者の間に紐を張り、トウロウと紅白の索麺を吊す。この設えについての呼称はない。昔から竹は、竹山から切って調達している。トウロウは野辺地町のマエダストア(スーパーマーケット)から購入した。——「竹はあるんだ。



図66 盆棚(東北町添ノ沢 Y家) 3枚の写真を合成

竹山があんだ。竹切ってきて。そうやって」「なんだんだが(分からないが)、そうこれ(索麺を)みなやれば、下げるの、こう、シーパー(スーパーマーケット)がら買ってくるの。こした下げるの」「みんなシーパーにあるんだ。なんもはあ今やんね。90にも年寄りなたきゃなもやれね。」

東北町添ノ沢の墓地

・墓地と棚



図67 墓地(添ノ沢)



図68 盆棚(コモのみ)



図69 盆棚(コモなし)

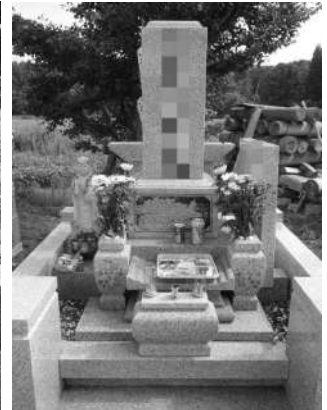


図70 盆棚(常設供物台の利用)

墓前に手の込んだ特別の棚をしつらえる家はない。法界折詰は常設の供物台にあげるか、手前に直置きする。コモを敷く場合もある。墓前にトウロウや盆センベイを供えるケースはみられない。

Z氏 1933(昭和8年)生まれ 宇道坂在住 女性

【屋内の棚】

・盆棚 昨年までは、仏壇の前にトウロウを吊したが、今年には行わなかった。理由は、青森市方面から毎週日曜に来る行商が、今年にはトウロウを持参しなかったのに日に留まらなかったのか、買い忘れてしまったからである。その行商は、魚、ミルク、ジュースや菓子などをそろえて、函館から青森までフェリーで来ている。——「今年(トウロウを)持って来なかったもの。いつも来てたら来るんだよ。青森(青森市方面)がら。モノ売の人でね。いるの。北海道がらモノをあの、仕入れて持って来るって、へては何年もやってるの。何年も私が。その人よ。うん。日曜日てば来ます。食べるの何でも。食べるのがら飲むのがら何でも！何てるべえ、北海道がらそのあれえ、青森のあそごまで、フェリーで来るんだってよ。でそれがら持ってくるんだがどやすんだがね。」「その人は(トウロウを)仕入れて来るんだがどやすんだが、ハア、私何年もつぎあっています。(今年も)来ました。うん。で私それ(トウロウ)買うの忘れたの(笑)。その人もなもしゃべんねがったどごで。忘れだっきゃ。」「(行商は)日曜日てば毎週来ます。9時ちょっと前だな。牛乳持ってくるの。牛乳はわだしだち買って、お父さんがぐえ悪くなったどぎ飲まへで。へでそれがら毎週。毎週来ます。」「私一人こ、今一人だべしほれ一人でばせばわれえふたんどもいるべえたて。北海道がら青森まで来るんだってフェリーで。それを、仕入れて来るんだが、でえやて来るんだが。あとはわがりません。トラックのおっきいのであれモノつけるのでこう。うん。」「うん、さまざまさまざま。サガナがらジュースがら何でも！オガシがら飴がらなに、何でも持ってきます。果物がら何がら全部つけて来ますよ。」「(行商を利用しては)いや何軒も買ってねごった。(私の家は)お父さんがある(生きていた)どぎがら来てあつたどごで。牛乳飲むに。」「この牛乳(函館牛乳)ばし飲んでるの。ホガの牛乳飲んだどごありません。」

k.狩場沢(平内町)

平内町狩場沢は東津軽郡(津軽地方)だが、下北・上北地方に隣接する。聞き取りをおこなったところ、盆棚に共通の特徴がみられた。

α氏 1949(昭和24)年 狩場沢生まれ 男性 およびその夫人β氏

【屋外の棚】

・盆棚 現在は、墓石の石段を利用している。石段の上に「スダレ」(こも)を敷き、その上に供物をのせる。「スダレ」は、現在のものの2倍くらいの大きさがあつたという。その上に、料理ごとに木の葉を敷いて料理をのせた。現在は、プラスチック折に詰めた法界弁当、枝豆、菓子、缶入飲料を供える。7種類の供物を糸で繫げたもの(同じものを仏壇の前にも吊す)を1本、脇にそえる。——「で、これを16日、送ればさ、送り盆の日に、これを全部とって、で、このスダレってさ、これ本来であればさ、この下にスダレ敷くのさ。これ小さいけど、ムガシだばもっと大きかった。で、その上に結局、今はこういうようによ、ひとかたまりに料理がこうなってるけど、ひとつずつこう、何だ、木の葉っぱだどが、そういうのでこのスダレの上さ飾ったんだ。でそれを、これまだまだ大きんだ。この倍くらいある。スダレを。で送り盆の16日になれば、この料理と、こういうのさ、スダレのナガにつづんで、ま、海に流した。海にながした。ご海だがら。ただ最近ほら、環境問題どが、そういうのでそういうのなぐなつたし、ムガシはそれが、いわゆるその先祖を供養するっていう、いわゆる死んだ人をあの世さ帰してやるって。」「(今は)やらないやらない。今は環境問題で、海にやったら大変なもんだよ。」



図71 盆棚(平内町狩場沢 α家)

・棚流し 16日に盆棚に吊していた供物を外し、供物の下に敷いていた「スダレ」で包み、海に流す。先祖を供養し、あの世に返してやるのだという。環境問題になるので現在は行わない。

【屋内の棚】

・盆棚 8月13日、仏壇の前に糸でつなげた供物を吊す。この糸吊りの供物をα家では「パーティ」、または「おやつパーティ」と言っている。「おやつパーティ」は、テグスに種々の供物を結びつけたもので、それを仏壇の手前の梁にプラスチック製の鉤

で5本吊す。上から、小さな透明のテトラパックに入った甘納豆、セロハンで包まれたフルーツ味のゼリー菓子、トウロウ、小さな青リンゴ、個包装の歌舞伎揚げ(揚げ菓子)、トウロウ、前出のゼリー菓子、盆センペイの順である。隣り合うトウロウや盆センペイの色が重ならないよう、また左右対照の色彩配置になるように配慮されている。トウロウは既製品の紙テープを切り取り、1個ずつ利用している。トウロウと菓子と糸で連ねるのは、α氏の娘の仕事である。このような風習は、かつてはこのあたりでは普通にみられたが、現在ではほとんどおこなわれていないとα氏は語る。——β氏「私たちは『パーティ』って言ってるなあ(笑)。『パーティ』って言ってるいなあ(笑)。『おやつパーティ』」。α氏「みなこんなもんでねがな。ムガシの風習だんだねな。これな」。β氏「それがなんていうのがわがんない。この飾り」。α氏「なんどがさって(名称は忘れた)」。「はあ、忘れじゃ。スダレだべ。なんどがスダレっていうんでねな。これスダレだね。」「(最中の飾りは)売ってるんだね。お盆用で。」「これさあの、結局この辺のつぐる人はさ、ムガシはみなこしてやったんだ。ただ、今、やるウヂ、あれだっきゃあ。ないど思うよ、こう、こういうのぶら下げで」。β氏「これが習慣なんだ。ここさ」。α氏「ムガシの年寄りんど生きでれば、おらだちの親どがよ、生きでればムガシの風習よぐおべでらんだけども、今全部省略だっきゃどこのウヂさ行っても。ウチなんかまださ、こういう名残のごってるけど」。

・新仏 新仏が出たときに、数年間、特別に棚を作るというようなことはない。——「いや、ないね。あのみ、他の地域ではそういうところはあるらしいよ。」

γ家 墓参の家族連れ 狩場沢在住 70代夫婦とその子・孫

【屋外の棚】

・盆棚 墓前の供物台を利用する。市販のコモを敷き、缶ビール、オロナミンC、果物、法界弁当を供える。墓石の左手には地藏があり、地藏にはコモの上に法界弁当とその手前に缶コーヒーを供える。供物台の手前には、盆にのせた茶碗と皿に、それぞれ「アラレ」と称して米と水をあわせたもの(水の子)を入れている。アラレは茶碗と皿とに分けているが、中身は同じものである。墓前では茶碗のアラレを箸で撒く。アラレを撒くのは、先祖に対してであると語る。なお、皿に入れられたアラレはラップをかけたままで手を付けない。



図72 盆棚(平内町狩場沢墓地 γ家)

4.考察

(1)屋外の棚

①棚の形態

東通村老部と六ヶ所村泊の墓地にある墓のうち、盆棚(構造物のない直置き型を含む)が設置されている計140基(老部93基、泊47基。1区画に複数の墓石や祭祀対象がある場合も、同じ家の墓であれば棚の設えは同じなので、1基として数える)を対象に、盆棚の形態を確認する。両地域とも、かつて総合的な調査がおこなわれた30~40年前にくらべると、棚の形も素材も多様化し進化しており、従来はみられなかった新しい創意と工夫の産物が見受けられる。その実態にあわせ、仮に下記Ⅰ~Ⅵの6つの類型に分類した。喜多村理子(1985)、高谷重夫(1995)による分類については図4(p.117)参照。

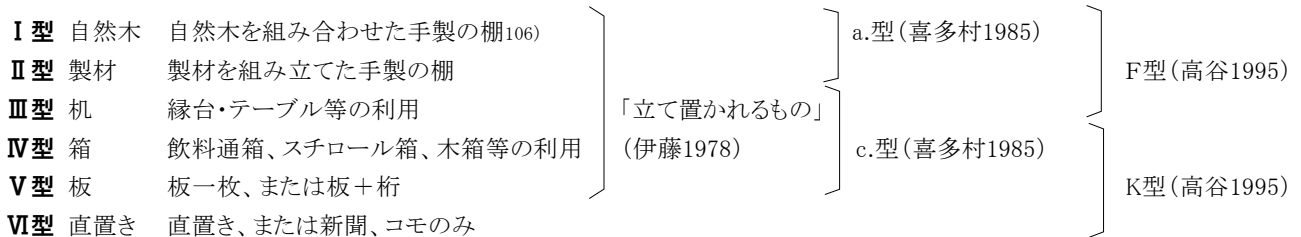


図73 屋外の棚の分類

盆棚の形態は、意外にも重要視されてこなかった傾向がある。全国の盆棚を形態から類型化した高谷重夫は、「盆棚の各地の形態をこれまでの報告から抜き出すくらいのは、容易い作業のように思われるかも知れないが、これが案外であって、正確な図や写真のある報告は稀であり、報告文も確実さを欠くものが多い」と問題を指摘している¹⁰⁷。このことは本県の既存の報告にもあてはまる。いま、仮に上記のようにこの地域の墓の盆棚を分類し、これを従来の研究にあてはめるならば、伊藤唯真の分類では、当地域にみられる屋外の棚はすべて「立ておかれる」型の変化型である¹⁰⁸。また、喜多村理子の分類¹⁰⁹にならえば、Ⅰ・Ⅱ型は棚の四隅に竹¹¹⁰を立てる型(a.型)に相当し、Ⅲ～Ⅴ型はひな壇や台を用いる型(f.型)に相当すると考えられる。高谷重夫の分類¹¹¹と比較すれば、Ⅰ～Ⅲ型は、四隅に柱を立て、盆花などを付ける型(高谷の分類では「F型」)に相当し、Ⅳ～Ⅵ型は、箱その他を台にして、上に板を載せたり、台なしで板を直接敷く型(同「K型」)に相当する。(なお、Ⅲ型は柱を立てているわけではないが、「机の四本の脚」が「柱」に相当するとみる。また、Ⅵ型は「棚」の一般的な概念からは外れるため、これを盆棚とみなすか意見が分かれる可能性があるが、墓標や供物台の手前に新聞やコモを敷くことで、目に見えない特設の祭壇の存在を示す「棚なき棚」であると筆者は考える。

Ⅰ～Ⅲ型は四本柱形式のバリエーションであるが、喜多村理子は四隅の柱(竹)の聖域を示す意味を重視し、高谷重夫はむしろ棚を高く掲げる構築材としての意味を重視している。竹を用いる場合が多く見られるのは、盆花や檜を立てるための花筒としても一石二鳥であることが理由の一つであると高谷は述べる¹¹²。今回訪れた墓地では、竹が用いられる事例はなかった。従来の報告書を見ると、竹ではなく自然木を利用している。棚づくりに適した竹が身近にあまりないという理由もあるが、標識としての象徴的意味よりも、高谷のいうように、「本来棚を高くかかげるための構築材であった」という実用的な意味合いが濃いと考えるのが適当だろう。それはⅠ型の事例ではより高い棚を作ろうとする努力が見られるし、Ⅳ型の事例であっても、箱を二つ重ねにして、より高くしようとする努力がみられることから顔かれる。少なくとも、この地域の現在の習俗では、四本の柱は単なる構築材の意味合いが強い。かわりに象徴的意味を負っているのは棚の手前にくくりつけられる1対の柳の枝である(老部)。

なお、今回は見当たらなかったが、泊地区における昭和50年の調査では、1本の棒に板の台を打ち付けた棚が広まりつつあることが記される¹¹³。本県では異例の形式である。高谷重夫の分類に当てはめれば、岡山県を中心とした近隣地域に分布する型(C型)に相当する¹¹⁴。一時の流行であったのか、現在は見当たらない。

②盆棚の高低と簡素化

老部と泊における棚の高さ(概算)で階層化したものが表1である。両地区を比較すると地域的な特徴が見いだされる。

表1

棚の高さ	東通村老部						六ヶ所村泊					
	基	% ※1	(柳あり)	% ※2	(既製品)	% ※3	基	% ※1	(柳あり)	% ※2	(既製品)	% ※3
60cm超	13	14%	13	100%	0	0%	0	0%	-	-	-	-
60cmまで	22	24%	19	86%	1	5%	0	0%	-	-	-	-
30cmまで	40	43%	27	68%	20	50%	24	51%	0	0%	11	46%
15cmまで	2	2%	1	50%	1	50%	14	30%	0	0%	11	79%
0cm	2	2%	0	0%	-	-	7	15%	0	0%	-	-
墓石供物台利用	14	15%	6	43%	-	-	2	4%	0	0%	-	-
計	93		66	71%	22	24%	47		0	0%	22	47%

※1対象とした墓(家ごとの区画)の総数に占める割合 ※2・3棚の高みのランク内での割合

棚の高さについて比較すると、東通村老部では30cmを超える盆棚が約40%を占めるのに対して、六ヶ所村泊では皆無(0%)である。すなわち、老部では棚を高く作る傾向があり、泊では低い傾向がある。しかし泊ではもともと棚が低く作られていたわけではなく、昭和50年度の調査では、「三尺余の高いもの」が作られていた¹¹⁵という。つまり、泊地区ではここ数十年のあいだに棚が相当低くなったのである。

現在では低い棚が多い泊地区には、もうひとつ、特徴がある。それは、既製品の利用の多さである。両地区の既製品化の現状をみると、老部では棚の総数に占める既製品の割合が24%だが、泊では約半数の47%にのぼる。泊では老部よりもはるかに既製品化が進んでいるといえる。

では、この二つの特徴、すなわち棚の低さと既製品化には関連性があるのだろうか。両地区の棚づくりについてももう少し詳しくみてみたい。

老部では、自然木(先が二股になった木)を利用する家はすでに皆無であるが、それでもなお既製品を利用せずに、角材を組み合わせて棚を手作りすることが行われてきた。理由のひとつは、製材所の存在であったと考えられる。集落を流れる老部川沿いの製材所から「キパズ」(端材)を手に入れることができた(東通村老部出身K氏)。素材が自然木からキパズへと変わっても、自らの手で組み、拵えるという行為は伝承された。手作りであればこそ、希望する高さ、すなわち棚をより高く(60cm超が14%)作ることができると考えられる(残念ながら、高く作ることの意図について今回の調査では聞くことができなかった)。

一方、泊では、30cm以下の盆棚の約半数(46%)、15cm以下の盆棚に至っては約8割(79%)が既製品である(図74)。30cm以下の盆棚の場合によくみられるのが、瓶ビールや瓶入り清涼飲料水の通箱、発泡スチロールや素麺の箱の利用である。また、折りたたみ式の小型のちゃぶ台を用いたものもみられる。棚の高さにこだわらなければ、さまざまな箱やテーブルを盆棚にすることができるし、半永久的に利用でき、始末も簡単で合理的である。昭和50年度の泊地区の調査では、四本脚の棚の棒が長いために後片付けに手間がかかることから、「最近是一本の棒に板の台を打ち付けたホゲイダナが見えて来ている」という変化が報告されている¹¹⁶⁾。つまり、棚を高く掲げることの意味よりも合理性(簡便さ)が優先されている。おそらくこれが既製品を用いる動機に通じている。老部でも、高めの棚は手作りだが、低くなるほど同様の既製品化の傾向がみられる(図74)。

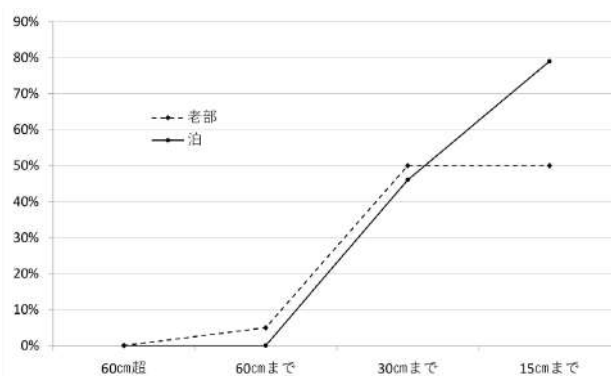


図74 棚の高さ(横軸)と既製品の割合(縦軸)

以上から、棚の低さと既製品化には同じ方向の力(動機)が働いているといえる。既製品化の傾向は、全国的にみればすでに1980年代には「町から出来合のタナを買って来る家が増えていた」と報告されている¹¹⁷⁾。今回調査した東通村や六ヶ所村では高谷重夫の分類によるF型(四本脚の形式)¹¹⁸⁾の棚が伝統的に作られてきたことから、ビールの通い箱や机が転用されやすかったものと思われる。関西方面でも、近年はプラスチックのコンテナやバケツ、ビールの通い箱を利用する例が散見されるが、いずれも屋外の無縁仏の棚である¹¹⁹⁾。これが無縁仏に対する扱いの軽重に関わるものか、或いは屋外での耐久性という合理的判断からか、心意は不明だが、本県では同じ扱い(プラ製品の転用)が先祖(本仏)に対してなされていることは興味深い。

既製品化は、棚の装飾についての簡素化をも伴っているようである。柳の木を棚の前方(現在では位置はさまざま)に掲げる習わしは、老部の屋外の棚の特徴のひとつであるが、この習俗にも、盆棚の高さ=既製品化との関連がみられる。老部では、棚の高さが低くなるにつれて、柳を掲げない家が多くなる(図75)。低い棚ほど既製品が多いことはすでに確認したが、既製品を利用することは合理性を優先する志向に基づくものであることから、同様の理由で「柳」というシンボルを省略する傾向につながっていると考えられる。

伊藤唯真は、「樽、箱、縁台、机などを利用して棚とし、周辺に竹を立てるという簡便なもの」が多くなる傾向を、盆棚の簡素化の流れとして語っている¹²⁰⁾。箱や縁台、机などを利用するとき、本来は棚の構造材(あるいは象徴的素材)であった竹は、単にまわりに立てられる「かざり」(合理性から逸脱した余剰、あそび)であると認識されるようになる。合理性が優先されれば省略される。老部における柳の木の省略も、棚の既製品化=棚の高さの低下に連動している。

なお、六ヶ所村泊では、柳を用いる家は皆無である。聞いたところ、習俗が廃れたのではなく、元来行っていないようである。

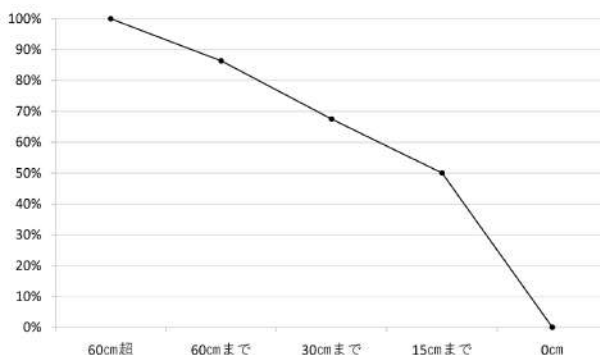


図75 老部地区: 棚の高さ(横軸)と柳を立てる割合(縦軸)

③墓石の供物台と盆棚

新しい墓石には常設の供物台が付属するものがみられる。しかし老部では墓石の供物台を利用する割合は、供物台のない墓石を含め墓地全体の15%、泊では4%に過ぎない。多くは、別に盆棚を特設している。もし、墓石の供物台が盆棚のかわりになると考えるなら、こぞって供物台を利用するだろう。しかし8割~9割もの家々で供物台を利用しない(墓石に供物台がない場合もある)ということは、盆棚は墓石の供物台では代用できない、特別なしつらえであると考えられていることを示している。本仏の祭場が屋内に移ってきたのちも「新しい祭り方が出来ても、もとの慣行は廃せられず、屋上に屋を架して行った結果がこのような[外にも内にも同時に祭場を設けるという]習俗を生んだ」(高谷重夫)¹²¹⁾のと同じように、まさに「屋上に屋を架す」かたちで、石造りの供物台(棚)が出現しても、なお仮設の棚を、更に追加して設置しているのである。

従来、盆棚の消滅は供物台の出現との関係で語られる場合があった。「墓石の供物台ができたから」「供物台が代わりになるから」盆棚を作ることをやめた¹²²⁾というのである。そのように見受けられる事例も確かにある。しかし、いま述べたように老部や泊の墓地では、



図76 立派な石製の供物台があっても、盆棚としては利用されていない例(老部)

石製の供物台やスペースがありながら、利用されていないのがみられる。そのような事例から考えると、少なくともこの地域では、石製の供物台(常設の棚)の出現と盆棚(臨時の棚)の消滅は別の事象である。両者に関連がないことは、上述のデータが明らかに示している。

ただし、盆棚に対する「特別感」が消滅したときには、墓石に付属する供物台を利用するようになる。しかしこの場合、「供物台を盆棚とみなして」利用しているのではない。外見上形式上は供物台を盆棚として利用しているように見えるが、盆棚が特別なしつらえであるという意識、つまり盆棚という概念自体がすでに失われている。「盆棚のかわり」に利用しているのではない。

(2) 屋内の棚

① 棚の形態



a 一体型

a' 半一体型

b 独立型(別棚)

図77 屋内の棚の形態

今回訪問した地域では、ロープを横に張るか横木を渡し、それらから供物を糸で吊す形式の盆棚が多数を占めた。

この型式には2種類ある。ひとつは、仏壇の両扉の上や直近にロープや棹を渡すものである。いまひとつは、仏壇とは離れた場所に独立した柱を立ててロープや棹を渡すものである。仮に、前者を「一体型」、後者を「独立型」と呼ぶ。

a 「一体型」は仏壇(常設の魂棚)を盆棚(臨時の魂棚)として利用する形態の一種である(図77左)。この場合、仏壇前のロープや横木から供物が吊された設えは、仏壇の「飾り」として認識される場合が多いようである。

a' 上記のように仏壇に密着せず、少し離れた場所に2本柱の棚が置かれる様式が「半一体型」である。東北町添ノ沢では、仏壇の1メートルほど手前に2本の竹を3mほどの間隔で立ててロープを渡し、ロープにトウロウや紅白の索麺などの供物を吊り下げる(図77中央 ※写真は3枚を合成したもの)。

b 「独立型」の事例は少ないが、仏壇とは明らかに別の位置に木や竹を2本立てて、その2本の柱の間に横木やロープを渡す型式である(図77右)。今回訪問した地域では次のような事例を確認した。六ヶ所村泊では、木製の柱2本に横木を渡した専用の「木枠」が用意され、盆の期間中に、仏壇とはすこし離れた別の場所に据えた大きなテーブルの上に設置される。仏壇に対して「別棚」が設置される例である。横木から等間隔に下ろされた糸には、多数の菓子が結びつけられる。位牌や遺影はすべて、仏壇から取り出され、別のテーブルの上に並べられる。(同様の事例は、従来の調査では東通村小田野沢、白糠で記録されている)¹²³。空になった仏壇についての呼称は聞かれなかったが、過去の青森県南部地方の調査事例では「空棚」と呼ばれ、これもまた盆中に礼拝の対象となるという¹²⁴。テーブルの上には、位牌とともに多数の供物がならべられる。

「独立型」の事例は、高谷重夫の考え方にならば、四本柱の竹(または木材)を立てる型式(高谷の分類では「F」型)が2本に簡略化された型(同「J」型)に相当する。すなわち「両脇に笹竹を立て、これに縄を渡し、それに粟の穂、ホオズキ、芋の葉、青豆を掛ける」タイプである¹²⁵。高谷によるとこの形式は関東・東北に多い型であり、その変化型として「縄を張る代りに横に竹を渡し、それにさまざまな物を掛ける」方式も一般的であるという¹²⁶。

今回の調査地域では、上記のとおり「独立型」や「半一体型」のように、仏壇と一定の距離感を保つ設えが伝承されている事実を確認した。「独立型」を、たとえば盆の祭壇が仏壇とは別の棚としてつくられていた時代の状況を伝えるものとして、「半一体型」を、たとえば棚が仏壇に引き寄せられつつある段階を示すものとして、それぞれ仮に位置づけることが許されるならば、そのバリエーションは、時間差として解釈できる可能性がある。ただし、あくまで仮説であり、より多くの事例の収集と実証が必要である。伊藤唯真は、竹や葦を横に渡して野菜などの供物を吊す形式について「供物をのせる棚の部分が無くなったものかとも思われる」と述べる一方で、東日本にみられる墓前の供物の飾り方を引き合いに出して「棚以前の形をとどめたものかとも考えられる」¹²⁷と述べている。すなわち、横に渡す一本の棒は、棚が「簡略化された様態」と捉えることもできるし、逆に、棚へと「発展する前段階の様態」と考えることもできる。いずれにしても、こんにち仏壇の前に掲げられている横木やロープが、盆棚の変態であるとみて間違いなさそうである。つまり起源的には「飾り」ではなく「盆棚の本体」である。しかし現在の当該地域では、供物を吊す横木やロープは盆棚の「飾り」として認識されている場合が多い。

② 供物と容器

供物を吊す糸は5・7・9・11本のいずれか(奇数)である。吊される供物には、ハマナス(朱色)、小リンゴ(緑色)、ササゲ(緑色)などの野菜・蔬菜をはじめ、袋菓子やミニゼリー、トウロウ、盆センベイが用いられる。袋菓子の選定にあたっては、従来から用いられてきた蔬菜や野菜の色が意識されている。たとえば、ハマナスの朱色に相当するものとして「かつばえびせん」(カルビー)、ササゲや小リンゴの緑色に相当するものとして「サッポロポテトベジタブル」(カルビー)が用いられている。また、ハマナスは糸の中間に、小リンゴは糸の末端に取り付けられ、糸に緊張感を持たせる「おもり」としての役目を果たしている。それぞれに対応するものとして、近年では例えば「メン子ちゃんゼリー」(秋山食品)のいちご味(赤色)と青りんご味(緑色)が用いられている。このような、供物を吊す方式の盆棚をのことを、当地では「飾り」「ハタ」「おやつパーティ」などと呼んでいる。木や紐を横に渡し、供物を吊す事例は他の地域でもよくみられる。しかし長い糸を何本も垂らし、多くの供物を数珠つなぎに吊す形式は、下北地方にのみ顕著である。東通村老部に嫁いだ上北地方南部(上北町)出身の女性は、出身地ではこのような習慣がなかったと語る(東通村老部H氏)。筆者が上北地方中部に位置する東北町を訪問した際も、トウロウが使用されていたが、糸に多数の供物を吊す型式のものはみられなかった。この型式の由来は不明である。

次に、吊される供物のなかで、本県において特徴的なものを2つ取り上げる。「トウロウ」と「盆センベイ」である。

「トウロウ」(最中の皮でできた極彩色の吊り菓子。図78手前)は、主に秋田県や青森県津軽地方・北海道で用いられる供物であるが、今回の調査地域である下北地方と上北地方の北部でも盛んに用いられていた(筆者のこれまでの実地調査では、上北地方を南下するにつれて用いられなくなる)。「トウロウ」は通常、1本の紙テープ(古くは糸)で2個が繋がれた、2個1組の形式で販売されており、秋田県や本県津軽地方、北海道ではそのまま吊り下げて用いる。しかし、下北地方では、わざわざ1個ずつに切り離して用いる。現在、下北地方で一般的に用いられているトウロウは、むつ市のA商店が販売するものであるが、OEM商品であり、製造元はその時々により津軽地方や秋田県内など、他の地域のものが入力されている。つまり、他地域の人々の需要にあわせて作られている型式の商品を、下北地方の人々は、自らの用途に合うように加工して利用しているのである。また、「トウロウ」は1袋分の中身を使い切るのが一般的だが、下北地方ではすべてを使い切らずに残すことが多い。つまり、「トウロウ」は、そもそも下北地方の人々が吊り菓子として用いるのに適した形になっていない。この事実は、伝播を考える手がかりのひとつとなる。「トウロウ」は、少なくとも別の地域で発展した形式の吊り菓子が、下北地方へと波及し、応用されたものであると考えられる。1969(昭和44)年当時は「トウロウ」を使っておらず、後の追加であると証言する人もいた(東通村老部H氏)。



図78 トウロウ・盆センベイ・から松

「盆センベイ」は、むつ市のA商店が製造する、赤・緑・黄の色鮮やかな煎餅(図78左奥)である。数枚を糸で繋ぎ、仏壇の前や墓前の棚に吊す。もともと、いわゆる南部煎餅が利用されていたが、現在ではこの「盆センベイ」を用いる家庭が多い。原材料は南部煎餅が小麦粉であるのに対し、「盆センベイ」はデンプン(ワキシーコーンスターチなど)である。湿気を吸いやすいことから、暑いお盆の時期に窓や扉を開放していると、萎びて変形してしまうのだと語る話者が複数いた(東通村C氏ほか)。しかし、デンプン煎餅は、小麦粉の煎餅よりも軽量で、かつ色彩が鮮やかであるという長所がある。盆棚に華やかさを添えるには、格好の品である。ただ、近年は盆棚に装飾的に吊すことなく、皿にのせて供える人も多くなっている。「盆センベイ」の流通は、青森県内の下北地域が盛んで、県内でも他の地域ではあまり用いられず、また販売も盛んではない。この盆供は下北地方に特徴的なもののひとつであると考えられる。なお、北海道には「から松」(図78右奥)という色鮮やかなデンプン製の薄い煎餅状(薄い最中の皮状)の供物があり、お盆に用いられる。形状や色彩感覚が似通っているが、両者の関係の有無は不明である。

最後に、供物の容器について。今回の聞き取りをおこなった地域のうち、下北半島の北部では屋内外の棚ともに、供物の容器として「ブドケバ」(ブドウの葉)が用いられてきた。しかし近年は変化がみられる。そのバリエーションは次のとおり。

供物の容器

- i ブドケバのみ
- ii ケバ+重箱
- iii ケバ+折(プラスチック製)
- iv ホイルカップまたはセロハンカップ+折
- v 折のみ

ホゲサラエの容器

- i ブドケバ
- ii 弁当箱
- iii なし(袋菓子のため不要)

i ~ v は現在のバリエーションであるが、おおむね i から v へと変化するプロセスを示していると解釈できる。もちろん、個々のケースで必ずこの順番に変化するというのではなく、全体として i から v の方向へと向かって変化する傾向がみられるということである。ブドケバからホイルカップやセロハンのカップ、折へと変化した理由は、持ち帰りの便がよいこと、買えば済むこ

と、清潔感などである。ブドケバは必ず裏側が用いられるが、「裏側がきれいだから」という理由である(東通村老部I氏)。また、「ブドケバには殺菌作用がある」と語る人もいる(東通村老部G氏)。食物をのせる容器として「清潔さ」が求められている。死者の霊に捧げる供物への配慮であることは勿論、前述したように、供物の一部または全部を飲食するという現実的な理由もある。

③ 供物の分配

従来、トウロウや盆センベイ、リンゴ、ハマナスなどが用いられていた屋内の棚の供物／飾り(吊り菓子)は、スナック菓子化が進んでいる。特に、アルミパウチ入りの小型の菓子が優勢である。袋菓子を用いる理由には、「盆センベイ(でんぷんせんべい)が湿気に弱い」(東通村砂子又C氏)という事情もあるようだが、何より盆に来訪する子どもたちに分け与えるという理由が大きい(六ヶ所村泊N氏)。菓子の選定には2つの基準がある。ひとつは、袋菓子の色である。かっぱえびせんの「赤」、サッポロポテトの「緑」は、赤いハマナスや青りんごの色が意識されてもいる。いまひとつは、子や孫の嗜好である。子どもを喜ばせたいという気持ちの強まりには、少子化という背景があることを示唆する話者もいた(六ヶ所村泊M氏)。これらの菓子は、お盆期間中に訪れる子どもたちが、好きなものを引きちぎって持ち帰る。この飾りを「おやつパーティ」と呼ぶ家もある(平内町狩場沢β氏)。

上記は屋内の棚についておこなわれる供物の分配であるが、かつては類似の習俗が屋外の棚(墓地)でおこなわれていた。ホゲ(墓参)の日、ヤントラ(墓地)に集まった子どもたちが、ブドケバや弁当箱に供物(とくに赤飯)をもらって歩くのである。これを「ホゲサラエ」といい、多少の競争的奪取という娯楽性も手伝って、子どもたちにとって楽しみな行事であった。しかし現在では、赤飯が子どもたちにとって魅力ある食べ物でなくなったことや、ひもじさを抱える子どもが減ったことなどから、ホゲサラエはみられない。「いまは供えた赤飯を食べる人もないので」ごく少量を、親戚の墓を訪ねて棚に配るだけだという(東通村老部I氏)。赤飯は無駄になるので袋菓子にしていると語る人もいる。

以上のように、従来、墓地という屋外でおこなわれた「ホゲサラエ」に類似した習俗として、現在では、屋内の盆棚に吊された菓子を子どもたち自らが糸を引いて引きちぎるという娯楽がおこなわれている。あたかも縁日の露店にみられる糸引きくじのように、あるいはこの地方で「ドップ」と呼ばれる紐引き籤のように、より一層の娯楽化・ゲーム化、そして供物の景品化が進んでいる。菓子の選定にあたっては、盆に来るとされる霊よりも、むしろ生きている人間(子ども)の嗜好が重視される傾向がみられる。ホゲサラエのような(穏やかな)競争や収奪はみられず、逆に子や孫の嗜好への手厚い配慮があるという点は、少子化という現代の事情が反映しているようである。従来の習俗を基本としつつ、現代のライフスタイルと人々の志向に適したかたちに変化発展しながら伝承されている。

まとめ

本稿では、青森県内の特定地域における盆の墓参習俗のうちの一部、盆棚とその周辺に焦点をあわせ、聞き取りと現地調査によってその現状を確認した。得られたデータにもとづき、屋内の棚・屋外の棚それぞれについて若干の考察を加えた。

屋外の棚については、既製品の利用(転用)と同時に、棚の高さや供物へのこだわりが薄れ、高さはより低く、設えは簡素化している傾向がみられた。その意味では、盆棚に対する特別な思いは薄らぎつつあるといえる[4.(1)①②]。一方で、墓石に付属する石製の供物台がありながら、盆棚として利用せずに、別に盆棚を特設する場合も多く、この点では盆棚の臨時性と特別性という観念が根強く受け継がれていることがわかった[4.(1)③]。なかには、石の供物台を利用せずに床面にコモだけを敷くものや、床に直接供物を置くものもみられた。それらは前者(棚の低床化・簡素化)の究極の形態でありながら、後者の意識(墓石の常設供物台をあえて利用しないというこだわり)が察せられる点で、「棚なき棚」というべき事態であった。

屋内の棚については、仏壇の手前に吊す「飾り」として認識されている特別の設えが、仏壇から離れた場所に置かれる事例がみられた。その置かれ方(仏壇との距離)には地域によるバリエーションがあり、仏壇との関係や、棚の様式の変遷や伝播のプロセスを、今後あらためて考える必要のあることが示唆された[4.(2)①]。また、供物／飾りとして用いられるトウロウは、他地域で発展した形式の吊り菓子が、下北地方に波及して応用されたものであることが予想された[4.(2)②]。墓地の棚でのホゲサラエ(子どもたちによる供物の争奪)が行われなくなった一方で、屋内の棚では今も類似のイベントがおこなわれている。少子化により、子ども同士で競い合う楽しみは殆ど無くなったが、別の娯楽性を加えて伝承されていることが明らかになった[4.(2)③]。

聞き取りを通じ、盆棚とその周辺には、盆に去来するとされる存在に対する人々の感覚が反映されており、その表現は豊かで多様性に富むものであることを、あらためて認識させられた。同時に、その表現が急激に変わりつつあること、人々の意識が大きく変化しつつあることを実感した。そしてその変化には、変わりゆく生活の現実に呼応した庶民の知恵と工夫が感じられた。盆にまつわる習俗がどのように継承されていくか、今後も注目したい。

謝辞

盆中のお忙しいなかお時間を割いて快くお話を聞かせてくださいました地域のみなさまに心から御礼を申し上げます。蛭名由子氏からご教示をいただきました。記して感謝を申し上げます。

後注

- 2)柳田國男1946『先祖の話』,柳田國男1988『柳田國男全集』第十五卷
- 3)たとえば七夕の棚は「地上から離れて建てある建物がたなで、其形式の空中に立て上つたものがさずき、即、屋根のないやぐらの形」(折口信夫1930-1932「年中行事—民間行事伝承の研究—」,折口博士記念会編昭和30『折口信夫全集』第十五巻p.62)であるということからすれば、地面に直接接する板や置き石は棚とはいえないが、ここでは同じ機能や目的を持つものとして一緒に扱う。
- 4)対象となる「盆棚」について、「精霊祭りのために特別にしつらえられた祭壇」が常識的な定義ではあるが、その範囲を定めることは難しいことから、「常設の魂棚」(柳田國男)を含め、先祖、無縁など仏の種類にかかわらず「いかなる形のものであろうと盆の精霊祭りの祭壇すべてを盆棚」であると定義した(高谷重夫1988「盆棚の類型」高谷重夫1995『盆行事の民俗学的研究』pp.5-6)
- 5)最上孝敬、藤井正雄、伊藤唯真、喜多村理子、高谷重夫など
- 6)喜多村理子、高谷重夫など
- 7)関沢まゆみ・国立歴史民俗博物館編2015『盆行事と葬送墓制』p.28
- 8)高谷重夫1988「盆棚の類型」(高谷重夫1995『盆行事の民俗学的研究』p.5)
- 9)北海道みんぞく文化研究会1986『北海道を探る12 北海道生活文化研究の視点』p.7,宮良高弘編1993『北の民俗学』p.2
- 10)年中行事の項目自体みられない自治体誌も多く、年中行事という項目があっても、地域のイベント、町内会の行事等が記載されている。
- 11)三元社編1934『旅と伝説』第7年7月号、通巻79号 一盆行事号一
- 12)柳田國男編1943『民間伝承』第九巻・第三号、通巻93号 一盆祭特輯一
- 13)柳田國男1946『先祖の話』,柳田國男1988『柳田國男全集』第十五巻
- 14)前掲書p.72
- 15)前掲書pp.73-75。「同じ無縁仏といふ中でも、文字通り家と全く縁の無い亡霊以外に、家の族員にして未婚のままで死んだ者」「同じ無縁様の中でも、このみさきと家々の無縁さま、即ち祀る子孫のない霊とは、明かに二種別々のものであつた。」
- 16)前掲書pp.93-94
- 17)前掲書p.74
- 18)前掲書pp.74,93-94「盆の魂棚の位置構造又は管理方法が、年棚に比べると更に何層倍か、地方毎の変化を見せて居るのも、一つの原因は確かにこの所謂無縁仏、外精霊の参加に在る」「すでに清まはつたみたまの祭に近づけまいとした心遣ひは、今でも荒棚の構造の上に現はれて居て、或は此棚を軒の端に設けたり、又はわざと今年竹を柱に用ゐて、それを青葉で包んだり、成るべく常の魂棚とちがへようとする」
- 19)前掲書p.75
- 20)前掲書p.75
- 21)前掲書pp.75-76
- 22)前掲書p.76
- 23)前掲書p.83「是が或は今日の盆の無縁仏、外精霊など」といふ思想の基づく所の、別に国内にも何か有つたこと、所謂三界万霊の外來教義などは、たまたま是と習合しかゝつて未だ遂げざるものである」、同書p.91「或は最初から既にあつたにしても、後々仏教の感化によつて、特にこの部分で著しく発達した」、同書p.93「外精霊の爲にするほかひ、是は必ずしも外來宗教によつて教へられた新たな行法でなかつたか知らぬ」
- 24)前掲書p.83
- 25)前掲書pp.80-81「明かに食物を中心とし、さうして物貰ひとの関係があつた」「大抵は犬鴉が来て食ひ、又それに先だつて貧民が集まつて之を取り去つた」
- 26)前掲書p.92
- 27)桜田勝徳1960「無縁仏をめぐる問題」西郊民俗談話会編1960『西郊民俗』第十三号pp.1-4
- 28)大島建彦1960「先祖と無縁仏」西郊民俗談話会編1960『西郊民俗』第十三号p.13
- 29)前掲書pp.13-14
- 30)最上孝敬1960「無縁仏について」西郊民俗談話会編1960『西郊民俗』第十三号pp.6-7
- 31)この「特輯号」では、その他各地の貴重な事例が報告されるとともに、井之口章次によつて、無縁仏の範疇や成立過程を追究するための聞き取りの際の具体的な項目(祭り方、供物の内容、供え方、処分の方法など)が示された(井之口章次1960「無縁仏調査要項」西郊民俗談話会編1960『西郊民俗』第十三号pp.58-59)。
- 32)「みさき」と「家々の無縁さま」が明らかに別の二種のものであるという柳田國男の主張に沿つたもの。
- 33)藤井正雄1971「無縁仏考」大島建彦編1988『無縁仏』
- 34)最上孝敬1975「盆の祭り」大島建彦編1988『無縁仏』
- 35)前掲書。伊藤唯真も戸別の屋内祭祀に先行して屋外での共同祭祀があつたことを主張している[伊藤唯真1978a]。伊藤は、「無縁仏」が外來宗教による新しい概念であるとしたうえで、「ホウカイ」という語に着目してその事情を具体的に論じた。ホウカイという語は、無縁の霊を指すことばとして用いられ、それを迎える火を「ホウカイ火」、供養する飯を「ホウカイ飯」、供養する棚を「ホウカイ棚」といったように用いられているが、柳田國男は「ホウカイ」(ホカイ)が行器に由来することばであり、たむけの行為であると捉えた。これに対し、伊藤は、ホカイ(3音節)がホウカイ(4音節)転じたと考えるより、「法界」の語を語源としたほうが自然であること、「法界」という語は日本でも古代(奈良時代)以来の伝統的な用語であることなどから、仏教用語の「法界」「法衆生」「無縁法界」などの用語と無関係ではないと考えた(伊藤唯真1978「無縁霊とその祭碑」伊藤唯真1984『仏教と民俗宗教』p.137)。仏教用語としてのホウカイは、本来「有縁無縁の精霊を包括した広範な霊の世界を

意味する語」であり、とりわけ中世以降は祭祀を必要とする有縁無縁の一切精霊であるという認識が強まり、中世の結縁講衆が造立した「法界万霊」の供養塔碑は、祭るものを持たない無縁の霊を祭るという性格を持っていたという。それは共同で祭られており、庶民が個家の石塔墓を持ち得ない時代には、この法界塔碑が有縁無縁を含めた一切精霊に対する参り墓の役割を担っていたと考えられるという。各家での祭祀が行われるようになる近世よりも前には、法界塔碑での共同供養があった、すなわち戸別の屋内祭祀に先行して、屋外での共同祭祀があったと主張する(伊藤唯真1978「無縁霊とその祭碑」伊藤唯真1984『仏教と民俗宗教』pp.146-147)。

- 36)伊藤唯真1978「盆棚と無縁棚」大島建彦編1978『講座日本の民俗6年中行事』p.119 37)前掲書p.120 38)前掲書pp.122-123 39)前掲書pp.124-125
- 40)前掲書pp.127-128 41)前掲書pp.129-130
- 42)喜多村理子1976「新仏の祭り―新設される棚の設置場所を中心として―」早稲田大学民俗と歴史の会編1976『民俗と歴史』三pp.25-26
- 43)小松[喜多村]理子1977「盆棚のいろいろ(一)」日本常民文化研究所1977『民具マンスリー』9巻11号,p.7
- 44)小松[喜多村]理子1977「盆棚のいろいろ(二)」日本常民文化研究所1977『民具マンスリー』9巻12号,pp.5-7
- 45)喜多村理子1985「盆に迎える霊についての再検討」大島建彦編1988『無縁仏』pp.144-172
- 46)(村人たちは)「それまではなぜ先祖を屋内と屋外で祭るのかと微かに疑問を抱いていた」が、寺院による無縁の概念の導入による、仏壇は先祖で屋外の棚は無縁、という新しい解釈が、人々を納得へと導いたという。「今後この新しい解釈は年々広まってゆく」と述べている(喜多村理子1985「盆に迎える霊についての再検討」大島建彦編1988『無縁仏』p.165)。
- 47)喜多村理子1985「盆に迎える霊についての再検討」大島建彦編1988『無縁仏』p.165
- 48)同上
- 49)この主張は、伊藤唯真が、本仏・新仏・無縁仏の三者相互の位相をそれぞれの精霊棚を通じて、本仏から、新仏と無縁仏は隔絶され、新仏と無縁仏では前者が優位にあるとし、無縁仏はいずれ家の仏となる新仏と異なるから、異なる形式の棚で祭る必要があった(伊藤唯真1978「盆棚と無縁棚」大島建彦編1978『講座日本の民俗6年中行事』)としたことに対して疑問を呈するもので、盆棚の形態や戸外という設置場所が、差別的な扱いの現れであると解釈した点(同書p.146)を問うものである。
- 50)高谷重夫1985「餓鬼の棚」高谷重雄1995『盆行事の民俗学的研究』pp.178-179 51)前掲書p.179 52)前掲書p.185 53)前掲書p.187
- 54)最上孝敬1960「無縁仏について」西郊民俗談話会編1960『西郊民俗』第十三号p.13
- 55)高谷重夫1985「餓鬼の棚」高谷重雄1995『盆行事の民俗学的研究』p.195
- 56)柳田國男1946『先祖の話』、柳田國男1988『柳田國男全集』第十五巻
- 57)高谷重夫1985「餓鬼の棚」高谷重雄1995『盆行事の民俗学的研究』p.187
- 58)前掲書p.190。高谷は盆棚にみられる他の供物、たとえば牛馬の作り物についても論じている。七夕には、東北関東中部ではマコモやワラで作られたショウリョウ馬が飾られるのに対し、西日本では、七夕に野菜の牛馬が飾られる。この事実からもわかるように、七夕における七夕馬と野菜の牛馬は本来同じものである(柳田國男は、七夕馬と、盆棚の茄子・胡瓜の馬牛と同じものだと考えない人が多くなったのは、盆が7日から始まるという習わしが衰え、一方で星祭りの風が普及したためとしている[柳田國男1939『歳時習俗語彙』p.459「ムカヘウマ」])としたうえで、七夕馬の習俗のあるところのみ、盆の牛馬の習俗も分布していることから、盆の野菜の牛馬は七夕馬からの発想であると結論した(高谷重夫「盆棚の牛馬」『盆行事の民俗学的研究』p.205)。また、牛馬の作り物に野菜が用いられるのは、季節が出盛りにあたっていたためだとし、供物のアレンジであるとした(高谷重夫「真菰の馬・茄子の牛―盆行事の一問題―」『盆行事の民俗学的研究』p.204)。
- 59)高谷重夫1988「盆棚の類型」(高谷重夫1995『盆行事の民俗学的研究』)
- 60)桜田勝徳「無縁仏をめぐる問題」西郊民俗談話会編1960『西郊民俗』第十三号pp.1-4
- 61)高谷重夫1988「もらいまつり―盆行事の一問題―」日本民俗学会編1988『日本民俗学』第174号p.72
- 62)柳田國男1946『先祖の話』、柳田國男1988『柳田國男全集』第十五巻p.83
- 63)喜多村理子1985「盆に迎える霊についての再検討」大島建彦編1988『無縁仏』p.167
- 64)折口信夫1930-1932『年中行事―民間行事伝承の研究―』pp.104-107
- 65)田中久夫1979「盂蘭盆会・餓鬼神・田の神」大島建彦編1988『無縁仏』p.138
- 66)前掲書p.132
- 67)鈴木満男1972「盆に来る霊―台湾の中元節を手がかりとした比較民俗学的試論」大島建彦編1988『無縁仏』pp.28-53
- 68)何彬2013『中国東南地域の民俗誌的研究』日本僑報社pp.168-169。何彬は、中国東南地域の中元で祭祀対象となる霊には三種類のものがあるという。第一の霊は祖先であり、第二の霊は血縁はあるが祖先になっていない「家鬼」など、第三の霊は「下界爺」「普渡公」「孤魂野鬼」「野鬼」などのいわゆる無縁仏である(同書pp.169-171)。
- 69)何彬2012「沖縄と福建の中元節・お盆の異同」国立歴史民俗博物館・松尾恒一編2012『琉球弧―海洋をめぐるモノ、人、文化―』pp.52-56
- 70)何彬2013『中国東南地域の民俗誌的研究』日本僑報社p.174
- 71)前掲書p.185
- 72)小松[喜多村]理子1977「盆棚のいろいろ(一)」日本常民文化研究所1975『民具マンスリー』9巻11号,p.7、同1977「盆棚(二)―設置場所を中心として―」日本常民文化研究所1975『民具マンスリー』9巻12号,pp.5-8
- 73)小松[喜多村]理子1977「盆棚(三)―棚の諸形態について―」日本常民文化研究所1975『民具マンスリー』9巻11号,p.7
- 74)伊藤唯真1978「盆棚と無縁棚」大島建彦編1978『講座日本の民俗6年中行事』p.119

- 75)前掲書p.120
- 76)高谷重夫1988「盆棚の類型」高谷重夫1995『盆行事の民俗学的研究』pp.5-6
- 77)前掲書pp.6-16
- 78)前掲書pp.16-17
- 79)小松[喜多村]理子1977「盆棚(二)－設置場所を中心として－」日本常民文化研究所1975『民具・マンスリー』9巻12号,pp.5-8
- 80)喜多村理子1985「盆に迎える壺についての再検討－先祖を祭る場所を通じて－」『日本民俗学』157・158,pp.5-8
- 81)関沢まゆみ1999「長老衆と死・葬・墓」新谷尚紀ほか編1999『講座 人間と環境 第9巻 死後の環境－他界への準備と墓』pp.201-203
- 82)前掲書pp.201-203
- 83)4つのタイプとは、①「三種の壺を区別し、屋内外で区別して祭るタイプ」(近畿地方に多い)、②「三種の壺を区別せず、すべて屋外で祀るタイプ」(近畿地方周縁部、中国、四国、九州の一部、東海、関東の一部)、③「無縁仏の棚は作らないが、屋内に盆棚を設けて一隅に無縁への供物を供えるタイプ」(各地)、④「仏壇をきれいにするが盆棚は作らないタイプ」(各地)である。
- 84)新谷尚紀2003「盆」新谷尚紀・波平恵美子・湯川洋司編『暮らしの中の民俗学2 一年』pp.82-86
- 85)関沢まゆみ2013「『戦後民俗学の認識論批判』と比較研究法の可能性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第178集pp.203-236
- 86)ただしこれ以外のタイプも存在することを指摘している。すなわち「屋内の座敷に盆棚を設け、棚の下の一隅に無縁仏や餓鬼仏のための供物を供えるというタイプが広くこれらの3つのタイプと併存してみられ、また仏壇をきれいにしてまつるだけで特に盆棚を設けないというタイプも実際上広くみられる」(前掲書p.227)
- 87)小川直之2015「列島の民俗文化と比較研究」関沢まゆみ・国立歴史民俗博物館2015『盆行事と葬送墓制』pp.191-195
- 88)藤井弘章2019「和歌山県高野町の盆棚」近畿大学民俗学研究所2019『民俗文化』第31号pp.1-75、藤井弘章2020「和歌山県橋本市の盆棚」近畿大学民俗学研究所2020『民族文化』第32号pp.65-120
- 89)青森県教育委員会編1971『下北半島山村振興町村民俗資料緊急調査報告書(第一次)』
- 90)東通村教育委員会編1980『青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第1集)東通村入口・上田屋・蒲野沢』、東通村教育委員会編1981『青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第2集)東通村大利・石持・鹿橋』、東通村教育委員会編1982『青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第3集)東通村尻芳・野牛・岩屋』、東通村教育委員会編1984『青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第4集)東通村猿ヶ森・袋部・下田屋・下田代』、東通村教育委員会編1980『青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第5集)東通村砂子又・上田代・老部・白糠』、東通村教育委員会編1987『青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第6集)東通村目名・尻屋・小田野沢』
- 91)青森県立郷土館1983『青森県立郷土館調査報告第14集 民俗-7 小田野沢の民俗 調査報告書』
- 92)東通村史編集委員会編1997『東通村史 民俗・芸能編』
- 93)青森県史編さん民俗部会編2007『青森県史 民俗編 資料 下北』
- 94)ただし、調査者による「棚」の捉え方によっては、棚が「ない」のではなく、あっても棚としてみとめられなかった可能性もある。調査書では盆棚の定義が示されていないことから、この点は注意が必要である。
- 95)東通村教育委員会編1984『青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第4集)東通村猿ヶ森・袋部・下田屋・下田代』57、東通村教育委員会編1980『青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第5集)東通村砂子又・上田代・老部・白糠』182、東通村教育委員会編1987『青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第6集)東通村目名・尻屋・小田野沢』61など。
- 96)この地域の概況と生活文化については、拙稿「青森県下北地方におけるサルケ(泥炭)の利用」を参照。
- 97)東通村教育委員会編1980『青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第5集)東通村砂子又・上田代・老部・白糠』pp.3-4
- 98)東通村教育委員会編1980『青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第5集)東通村砂子又・上田代・老部・白糠』pp.77-78
- 99)青森県史編さん民俗部会編2007『青森県史 民俗編 資料 下北』pp.303-305,308-310
- 100)「老婆会」の預金通帳を確かめたところ、「老母会」で登録されていたことから、正式名称を改めたという。
- 101)東通村教育委員会編1980『青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第5集)東通村砂子又・上田代・老部・白糠』pp.131-132
- 102)六ヶ所村教育委員会編1977『泊、出戸地区民俗資料調査報告書』p.7
- 103)六ヶ所村教育委員会編1977『泊、出戸地区民俗資料調査報告書』pp.205-207
- 104)以上青森県立郷土館1980『青森県立郷土館調査報告第7集・民俗4「鶏沢・有畑・浜田の民俗」調査報告書』pp.105-106
- 105)東北町史編集委員会編1994『東北町史』下巻Ⅱpp.46-47
- 106)この棚のイラスト(図73, I型)は、青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第5集)東通村入口砂子又・老部・白糠p.126掲載の盆棚のスケッチ(老部)および須藤功編2011『宮本常一とあるいた昭和の日本15 東北2』p.85掲載の東通村猿ヶ森の盆棚の写真、および現地での話者の証言を参考にして再現した。
- 107)高谷重夫『盆棚の類型』高谷重夫1995『盆行事の民俗学的研究』p.5,
- 108)伊藤の分類では、棚は大別して立ておかれるものと、吊り下げられるもの、の2種類である。
- 109)喜多村理子1985「盆に迎える壺についての再検討」『日本民俗学』157・158,大島建彦編1988『無縁仏』pp.144-151
- 110)ただし用いられている材料はこの場合竹ではない。喜多村は竹という素材の意味を重視するが、高谷は構築材としての意味を重視している。
- 111)高谷重夫『盆棚の類型』高谷重夫1995『盆行事の民俗学的研究』pp.6-15
- 112)前掲書p.16

- 113)六ヶ所村教育委員会編1977『泊、出戸地区民俗資料調査報告書』p.206
- 114)高谷重夫『盆棚の類型』高谷重夫1995『盆行事の民俗学的研究』p.9-10
- 115)六ヶ所村教育委員会編1977『泊、出戸地区民俗資料調査報告書』p.206および巻頭図版Ⅷ年中行事「ホゲイ棚」(泊)。写真をみると、確かに3尺以上の木製の盆棚が林立している。「はしがき」によると、調査は1975(昭和50年)に実施された。
- 116)前掲書p.206
- 117)高谷重夫1988「もらいまつりー盆行事の一問題ー」日本民俗学会編1988『日本民俗学』第一七四号,p65
- 118)高谷重夫によれば、F型は「四隅に笹竹を立てる型」であり、「南は奄美の島から、北は青森県まで広く分布」する。高谷は四本脚という棚の「構造」に着目して分類しており、竹という素材は重要でない。つまり高谷のいう「F型」とは四隅に柱を立てる形式であり、今回の調査地域にみられる盆棚もこれに該当する(高谷重夫『盆棚の類型』高谷重夫1995『盆行事の民俗学的研究』pp.9-10,16)。
- 119)和歌山県高野町を詳細に調査した藤井弘章によれば、「無縁仏の祀り方については、実に多様な形態が存在する」といい、机や樽、木の箱をはじめとして、バケツ、コンテナ、ビールケースなどを用いる例が報告されている(藤井弘章2019「和歌山県高野町の盆棚」近畿大学民俗学研究所2019『民俗文化』第31号pp.10,17-75)。
- 120)伊藤唯真1978「盆棚と無縁棚」大島建彦編1978『講座日本の民俗6年中行事』pp.119
- 121)高谷重夫1985『餓鬼の棚』大島建彦編1988『無縁仏』p.187
- 122)青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さんグループ2003『青森県史叢書下北半島西通りの民俗』p.139では、むつ市永下の事例として「墓が新しくなり供物を置く台ができたためタナを作らず折などに入れて供えている(傍線部筆者加筆)」という証言が紹介されている。
- 123)東通村教育委員会編1980『青森県下北郡東通村民俗調査報告書(第5集)東通村砂子又・上田代・老部・白糠』p.252の写真には、仏壇と別に祭壇を設けている様子が写っている。また、青森県立郷土館1983『青森県立郷土館調査報告第14集 民俗-7 小田野沢の民俗 調査報告書』p.95には、「ジョイの中央に戸板(今ではテーブル)を用意し仏壇から位牌を出して並べると記されている。
- 124)柳田國男編著1939『歳時習俗語彙』p.486
- 125)高谷重夫1988『盆棚の類型』高谷重夫1995『盆行事の民俗学的研究』p.14
- 126)前掲書p.14
- 127)伊藤唯真1978「盆棚と無縁棚」大島建彦編1978『講座日本の民俗6 年中行事』所収p.119

主な文献

- 伊藤唯真1978a「無縁霊とその祭碑」伊藤唯真1984『仏教と民俗宗教』国書刊行会
- 伊藤唯真1978b「盆棚と無縁棚」大島建彦編1978『講座日本の民俗6年中行事』有精堂出版
- 大島建彦1960「先祖と無縁仏」西郊民俗談話会編1960『西郊民俗』第十三号
- 折口信夫1930-1932『年中行事ー民間行事伝承の研究ー』折口博士記念会編1955『折口信夫全集』第15巻中央公論社
- 何彬2012「沖縄と福建の中元節・お盆の異同」国立歴史民俗博物館・松尾恒一編2012『琉球弧ー海洋をめぐるモノ、人、文化ー』
- 何彬2013『中国東南地域の民俗誌的研究』日本僑報社
- 喜多村(小松)理子1976「新仏の祭りー新設される棚の設置場所を中心としてー」早稲田大学民俗と歴史の会編1976『民俗と歴史』
- 喜多村(小松)理子1977a「盆棚のいろいろ(一)」日本常民文化研究所1977『民具マンスリー』9巻11号
- 喜多村(小松)理子1977b「盆棚のいろいろ(二)」日本常民文化研究所1977『民具マンスリー』9巻12号
- 喜多村(小松)理子1985「盆に迎える霊についての再検討ー先祖を祭る場所を通してー」『日本民俗学』157・158号,大島建彦編1988『無縁仏』
- 桜田勝徳1960「無縁仏をめぐる問題」西郊民俗談話会編1960『西郊民俗』
- 新谷尚紀2003「盆」新谷尚紀・波平恵美子・湯川洋司編『暮らしの中の民俗学2 一年』吉川弘文館
- 鈴木満男1972「盆にくる霊ー台湾の中元節を手がかりとした比較民俗学的試論ー」『民族学研究』37巻3号,大島建彦編1988『無縁仏』岩崎美術社
- 関沢まゆみ1999「長老と死・葬・墓」新谷尚紀ほか編1999『講座 人間と環境 第9巻 死後の環境ー世界への準備と墓』昭和堂
- 関沢まゆみ2013『戦後民俗学の認識論批判』と比較研究法の可能性』『国立歴史民俗博物館研究報告』第178集
- 高谷重夫1985「餓鬼の棚」高谷重雄1995『盆行事の民俗学的研究』
- 高谷重夫1988a「盆棚の類型」高谷重夫1995『盆行事の民俗学的研究』
- 高谷重夫1988b「もらいまつりー盆行事の一問題ー」日本民俗学会編1988『日本民俗学』第174号
- 田中久夫1979「盂蘭盆会・餓鬼神・田の神」『御影史学論集』5集,大島建彦編1988『無縁仏』岩崎美術社
- 藤井弘章2019「和歌山県高野町の盆棚」近畿大学民俗学研究所2019『民俗文化』第31号
- 藤井弘章2020「和歌山県橋本市の盆棚」近畿大学民俗学研究所2020『民族文化』第32号
- 藤井正雄1971「無縁仏考」『日本民俗学』74号,大島建彦編1988『無縁仏』
- 最上孝敬1960「無縁仏について」西郊民俗談話会編1960『西郊民俗』第十三号
- 最上孝敬1975「盆の祭り」『月刊文化財』142号,大島建彦編1988『無縁仏』岩崎美術社
- 柳田國男1946『先祖の話』,柳田國男1988『柳田國男全集』第十五巻